

百姓漁師の漁場認識

——ネ（根）の命名をめぐる——

The Fishing Ground Recognition of the Farming-Fisherman,
Over Naming of the Seafloor Topography

安室 知

YASUMURO Satoru

要 旨

“自然”を生業に利用しようとするとき、丸ごとの“自然”はとても人の手には負えるものではない。“自然”の一部を切り取ってきたり、また自然の力をそいだりしながら、人が扱える状態にまで“自然”を馴化させる必要がある。海や山での暮らしには、自然を分節化し利用するための民俗技術が発達している。本論では、自然を分節化し利用するためのもっとも基本的な技術として命名行為に注目する。とくに海付きの村に暮らす人びとが海という自然空間をどのように漁場として利用するかを海底微地形の認識と命名の中に見てゆく。

その結果、命名にみる漁場認識のあり方は、水深と陸からの距離によって、以下のよう
に3つのパターンに分類することができることがわかった。(1) 民俗空間のキワのうち
陸からもっとも近いところ(キワ・キワ)、水深20m未満の浅いところにあるイソネ。
(2) キワのうちオキ側のところ(キワ・オキ)、水深20mあたりのネ。(3) 民俗空間で
いうオキからダイナンのかけて、水深20m超で200mくらいまでの突出して浅くなっ
ているところにあるネ。

漁場となるネの名称について、上記3パターンを対照すると以下ようになる。

a. コーネ(小根)と一括されるネである。コーネはさらに細かく分けられているが、そ
のの一つ一つに固有名を持つ。「○○マエ」や「○○シリ」のように、隣接する陸地やそこ
にある対象物との相対的位置関係から命名されることが多い。さらに、ムラ人に共通する
ネの名前とともに、ジブンヤマと称する個人的なネも多く存在する。

b. オーネ(大根)と一括されるネである。「○○ネ」の名称が主。また、内部を細分化
するときには「○○モタレ」のようにヤマアテに用いるオオヤマの名称がそうした部分名
称に用いられることがある。

c. 「○○ダシ」の名称が付けられたものが多い。それは基本的にヤマアテの名称と一致する。

以上のような分類と認識の体系をもって、百姓漁師は眼前の海域を漁場として利用して
きたといえる。

【キーワード】 漁場認識、百姓漁師、ネ(根)、海底地形、命名、民俗分類、三浦半島

1. はじめに一問題の所在一

“自然”を生業に利用しようとするとき、丸ごとの“自然”はとても人の手には負えるものではない。人が扱える状態にまで“自然”を馴化させる必要がある。“自然”の一部を切り取ってきたり、また自然の力をそいだりしながら、やっと人が利用可能な状態になる。それは農耕や漁撈といった自然に寄り添い、その力を借りることで成り立つ生業において顕著である。

まさに海や山でのくらしには、自然を分節化し利用するための民俗技術が発達している。それは海村や山村においては生活文化体系の骨格をなすものである。本稿では、自然を分節化し利用するためのもっとも基本的な技術として命名行為に注目する。とくに海付きの村に暮らす人びとが海という自然空間をどのように漁場として利用するかを海底微地形の認識と命名の中にもみてゆく。

高度経済成長以前、海付きの村に暮らす漁師は漁を単一の漁業技術に特化させることはなかった。それは漁業暦を描いてみれば一目瞭然である。たとえ本人が潜水漁師や一本釣漁師であると自称していても、実際の漁活動は季節や時間帯に応じていくつもの漁を組み合わせていた。漁師の自己認識としては、自分をもっとも得意とする漁業技術を掲げてはいても、それはあくまで見かけの看板に過ぎない。ましてや、自家消費のためにおこなう漁を含めれば、漁師はいくつもの漁業技術を駆使して年間または1日の漁業暦を組み立てていた。そのことはじつは漁の内部だけにとどまらず、農や行商といった他生業との複合生業により海付きの村の生計は維持されてきたこととも関連する(安室、2011)。

ここでは、海底微地形の命名を手がかりに、一人の漁師がいかに漁場を認識し年間または1日の漁撈活動を成り立たせていたか、つまり“生きる”ための技術として漁場認識の方法を描き出すこととする。そのため、その村にどれだけの漁撈技術がレパートリーとして存在したかを羅列するつもりはない。あくまで一人の人がどのように複数の漁を組み合わせ生計維持していたかに注目し、それを前提に漁場認識の問題を探ることとする。

“生きる”ための技術としてみると、漁場特定の方法がヤマアテだけではないことは明白である。なぜなら、単一の漁法で一年の生計が維持される漁師というのは通常海付きの村には存在しないからである。また、一見すると、たとえば一本釣りのように年間を通して漁がおこなわれていても、一年の内には対象とする魚種が変わるし、それに伴って仕掛けや漁場、漁の時間帯も変わるからである。

つまり多様な漁場認識の方法を、環境に応じて使い分けたり、または組み合わせたりすることで、“生きる”ための技術とすることが可能となる。そうした漁場認識にかかわる多様な技術の使い分けや組み合わせの様相を明らかにしてこそ、“生きる”ための技術を理解したことになる。

従来、漁場認識に関する研究は船上におけるヤマアテを重視するあまり、他の認識のあり方については研究上無視する傾向があった(中野、2003)。また、海をめぐる漁師の知識が海底地形の詳細な分類や命名のあり方に目を奪われ、実際にそうした知識がどのように運用され実践的な技術となり得るのかといった研究はあまり省みられてこなかった(高橋、2004)。

本稿でとくに注目する海底微地形への命名行為に関しても、その多くがヤマアテとの関連で研究されてきた。しかも、それはヤマアテによる漁場認識の方法を説くものであった[例、(井上、1969)(斉藤・関、1980)]。漁場認識の方法として体系化しやすく、かつその体系性が精緻にして魅力あるものだけに、ヤマアテに研究者の耳目が集中するのは頷ける。だからといって、ヤマアテと海底地名との対応が必要にして十分な関連性を持っているかといえばそれは違うであろう。

ヤマアテは漁場認識の一方法にすぎないし、漁師が海底を直接目にするという当たり前の行為の持つ意味をもっと考えるべきである。とくに磯漁のような視認可能な浅い水域でおこなわれる漁についてはその必要性は高い。しかし、自家消費にとどまることの多い磯漁が生計維持の方途として研究上正当に評価されない現状においては、漁場認識の方法として視認の持つ意味がヤマアテと同等に論じられることはない。

さらに、これまでの漁場認識の研究でいえることは、漁師の海域環境への高度な適応態として示されることが多く、一見不合理な環境利用の実態は省みられることはなかった。それは海付きの村に暮らしてきた漁師の環境認識が合理的かつ緻密なものであるという所与の前提が研究者側にあったからである。

そのとき問題となるのは、環境利用の技術が歴史性を加味して検討されることがなかったことである。歴史的な経緯を加味するならば、調査時点における漁師の環境認識や環境利用のあり方がかならずしも最適なものであったとはいえない。それは歴史的過程の中で、その時々¹の社会的規範や隣村との力関係といったことが海域への技術的適応を規制する方向に作用することが多いからである。“生きる”ための技術として漁場利用を描くとき、歴史性のもたらす不合理は不可欠な視点である。

そうしたなか、漁場認識の重層性に関する研究は重要な意味を持つ。漁場空間を面として捉えるのではなく、海面・海中・海底というように立体的に捉え、かつその関連性を認識することの必要性が指摘されている（田和、1984）。それは、同一の海域であっても漁場名がそこを利用する村落間で異なることがあることに象徴される。その背景として村落間で漁獲対象が異なることが想定される。つまり、緯度・経度で示される漁場名だけでなく、水深（対象魚の生息域）ごとに漁場名が区別されている可能性を示している（矢島、2003）。このことは、漁場の命名が、村落各々の漁場戦略を反映した主観にもとづくものであるとともに、漁場としてみた場合、海域を3次元の立体的なものとして捉える必要性があることを示している。

ただし、漁場利用の重層性を考えるとき、漁場名の設定が必ずしも村落の主観に基づくものばかりであったとはいえない。むしろ隣接する村落の間では、国のような村落を越える権力の介入⁽¹⁾の有無にかかわらず、漁場利用を通して村と村とは影響し合い、その結果として漁場名の設定がなされてきた。その点こそが漁場利用の重層性の基盤にあるといえよう。また別の見方をすれば、重層性の視点を持って眺めることで漁場利用の隠れた歴史が見えてくる。

なお、言うまでもないことであるが、命名の問題を扱うとき、地形や民俗空間を示す名称と個別の地名とは峻別する必要がある。前者は分類名であるとともに概念を示すものとなっているのに対して、後者はあくまで実態をもった領域に付与される固有名である。ただそう言うものの、現実には漁場名をみてゆくと両者が複雑に関係し合い判然としない場合があるのも事実である。そこに漁場をめぐる命名のおもしろさがあるともいえる。

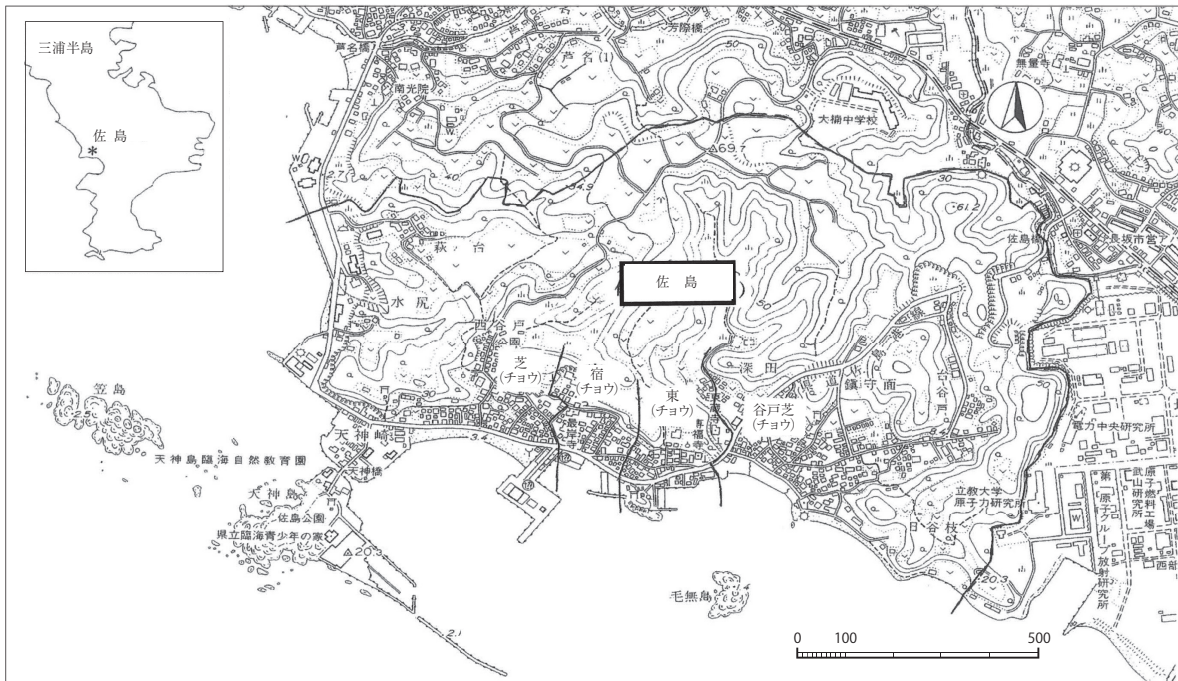
2. 海付きの村のくらしと民俗空間—調査地の概観—

1) 百姓漁師

本稿で主なフィールドとして取り上げるのは、神奈川県横須賀市佐島（昭和30年当時、西浦村佐島）である。聞き取り調査における時間軸は基本的に昭和20年代後半から30年まで（1950年代）、つまり日本が高度経済成長に入る直前⁽²⁾においている。

明治4年（1871）の戸籍簿によると、佐島の総戸数176戸のうち151戸が漁業に従事するが、そのうち135戸が農業も営む「農間漁業」とされている（神奈川県教育庁指導部文化財保護課、

図1 佐島の立地—ムラとチョウの関係—



※横須賀市作製「横須賀市域図2」（1989年）を下図とする。

1971)。漁家割合は85パーセントに達する。そうした状況は、本稿の設定した時間軸である昭和25-30年という高度経済成長期前までほとんど変わっていなかった。

佐島における民俗空間は住民の生活感覚から生み出されたものである。この点については、海付きの村の住民による環境認識とともに、別稿（安室、2008）に詳述してあるため、ここでは説明を省略する。以下では、佐島の立地環境及び民俗空間の概略について述べておく。

佐島は、北緯35度14分、東経139度36分、本州太平洋側の中程に位置する（図1）。三浦半島の西岸、相模湾に面する総戸数375戸うち農家数73戸（1970年時点）の海付きの村である（2000年世界農林業センサス）。太平洋岸を北上する黒潮の影響を受け、年平均気温は15.8度と温暖な気候のもとにある。それを象徴するように、海浜植物のハマユウが自然群落を形成する北限地として知られる。

また、本稿で取り上げた漁場認識のデータ（具体的には漁場名）は別稿（安室、2011）において取り上げた一人の百姓漁師I氏からの聞き取り調査によるものがほとんどである。I氏はモグリ漁師

を自称するが、だからといってモグリ（裸潜水漁）だけで生計が維持されていたわけではない。モグリは7月から9月までの3ヶ月間しかおこなうことができないからである。その意味で何らかの他の漁を組み合わせることで生計が維持されてきたといえる。それについては、若年期と壮年期の2期において漁撈暦を復元したが、そのどちらにもいえることであった（安室、2011）。



写真1 佐島の集落と海

漁の組み合わせの基本として、まず7-9月のモグリがあり、それに組み合わせて10月から5月までのミヅキがある。そのため、佐島ではI氏によ

うにモグリ漁がアイデンティティーの形成にとって大きな意味を持ち、結果モグリ漁師を自称する場合と、ミヅキ漁に重きを置きミヅキ漁師を自称する場合とがあった。ただし、やはり上記2つの漁の組み合わせだけで生計が維持されるわけでもなく、モグリとミヅキという組み合わせの合間に、一本釣りやエビ網（底刺網の一種）、その他の漁や海藻採集を組み合わせているのが実態であった。とくに女性が年間通しておこなうオカドリ（磯物採集）は自家消費に特化したものであるが、家計を維持する上で大きな意味を持っていた。その意味で、佐島での百姓漁師のくらしは、漁に限ってもその基本は男女分業を基本にした複合生業にあったというべきである。

2) オカハマのくらしと民俗空間

佐島のような海付きの村の生活を三浦半島西岸では「オカハマ」と呼ぶが、オカハマのオカは農を、ハマは漁を象徴する。そして、伝統的にそうした生活を営む人びとは「百姓漁師」と自らを称する（安室、2011）。

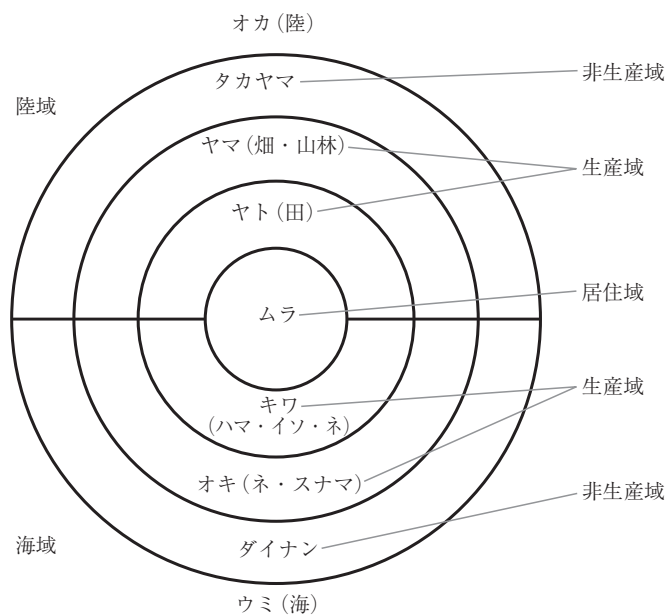
佐島は集落から見て南側に海が開け、北側は集落のすぐ後ろに三浦半島台地の傾斜地（ヤマと呼ばれる）が迫っている。そのため集落は山と海に囲まれた隔絶した景観をなしている。そして、傾斜地にヤト（谷戸）と呼ぶ浅谷が切れ込んであり、そこに小規模な水田が作られている。また、ヤマには畑が点々と拓かれている。そして、そのヤマは三浦半島の最高峰である大楠山（標高242m）に続く。その大楠山が台地の起伏とは区別され、タカヤマ（高山）と称される。

集落南側に開ける海域は、地先に天神島や笠島、毛無島といった小島が点在する。また集落北には天神崎、南には小田和湾があり、出入りの多い複雑な地形をなしている。海岸には磯根の岩礁帯が広がるが、集落前や磯根の合間には砂浜もある。そうした複雑で多様な環境が佐島の海の特長であり、黒潮の影響を受けた温暖な気候と相俟って、生活文化に多大な影響を与えている。

以上の点を住民の民俗的認識をもとにまとめると、海付きの村の生業空間は、図2のごとく概念化することができる。これはオカの民俗空間が同心円状に描かれることに対応して、ウミ側も同心円状に描くものである⁽³⁾。しかし、このときウミ側においてはひとつの前提がある。それはウミの民俗世界は水深に応じて水平的に展開する構造とすべきであるが、図2の場合には水深イコール陸地からの距離と捉えることで海側も同心円で描くこととした。そのため、図2では明確に示し得ないが、オカの民俗空間は同心円的であるのに対して、ウミの民俗世界は水平的な広がりを持っている⁽⁴⁾。

図2では、概念図の中心部にムラと呼ぶ居住域が設定されるが、それは実態としては海岸線に沿って東西に延びる格好になっている。それは台地が海岸線に迫っており宅地となる平坦地がごく限られているためである。そのムラは東、宿、芝、谷戸芝という4つのチョウ（町）からできている（図1）。チョウとはいわゆる村組のことである。そのチョウの中にそれぞれ4～6つのクミアイ（組合）が存在する。クミアイは5～10軒で構成され

図2 佐島の民俗空間概念図



ており、いわゆる近隣組である。そして、興味深いことにチョウやクミアイを結びつける社会組織としてキンジョ（近所）があり、より緊密な村内の社会関係を作り出している（安室、2008）。

まず、ムラを起点にオカ側を見てみると、民俗空間はヤト、ヤマ、タカヤマの順に同心円的に外縁化する。ヤトは台地に切れ込む浅谷で水田が分布するのに対して、ヤマは台地部を指しそこには山林とともに畑が多く拓かれている。ヤトとヤマは合わせてオカの生産域ということになり、日常的な生業活動の場となる。そして、その外縁に非日常の空間としてタカヤマが設定される。佐島の場合、具体的にはタカヤマは大楠山や武山を指しているが、そこは人が直接的に利用することはない非生産域である。しかし、一方ではヤマアテをするときの基点として漁の場面においては日常のかつ濃密に利用されている。

つづいて、ムラからウミ側を見てみると、キワ、オキ、ダイナンの順にやはりオカと同様に同心円的に外縁化する。繰り返すが、この同心円的理解には、水深イコール陸地からの距離という前提があってはじめて可能になる。ウミの民俗空間については、本論に直接関わる部分なため、次節において詳述する。

3. 海の民俗空間

1) キワ、オキ、ダイナン

佐島では、生業や日常の生活感覚をもとに、眼前の海を大きくキワとオキに分けて認識している。漢字を当てれば、キワは際、オキは沖である。詳しくは後述するがオキとキワとは水深 20 m ほど（モグリ漁のできる限界）を境としている。キワはタカ（高）といったりもする。タカは浅いことないしは周囲から高くなっていることを意味する。タカの場合は、必ずしも岸辺だけとは限らず、沖合にあっても海中のネが一部隆起しているところを指すこともある。

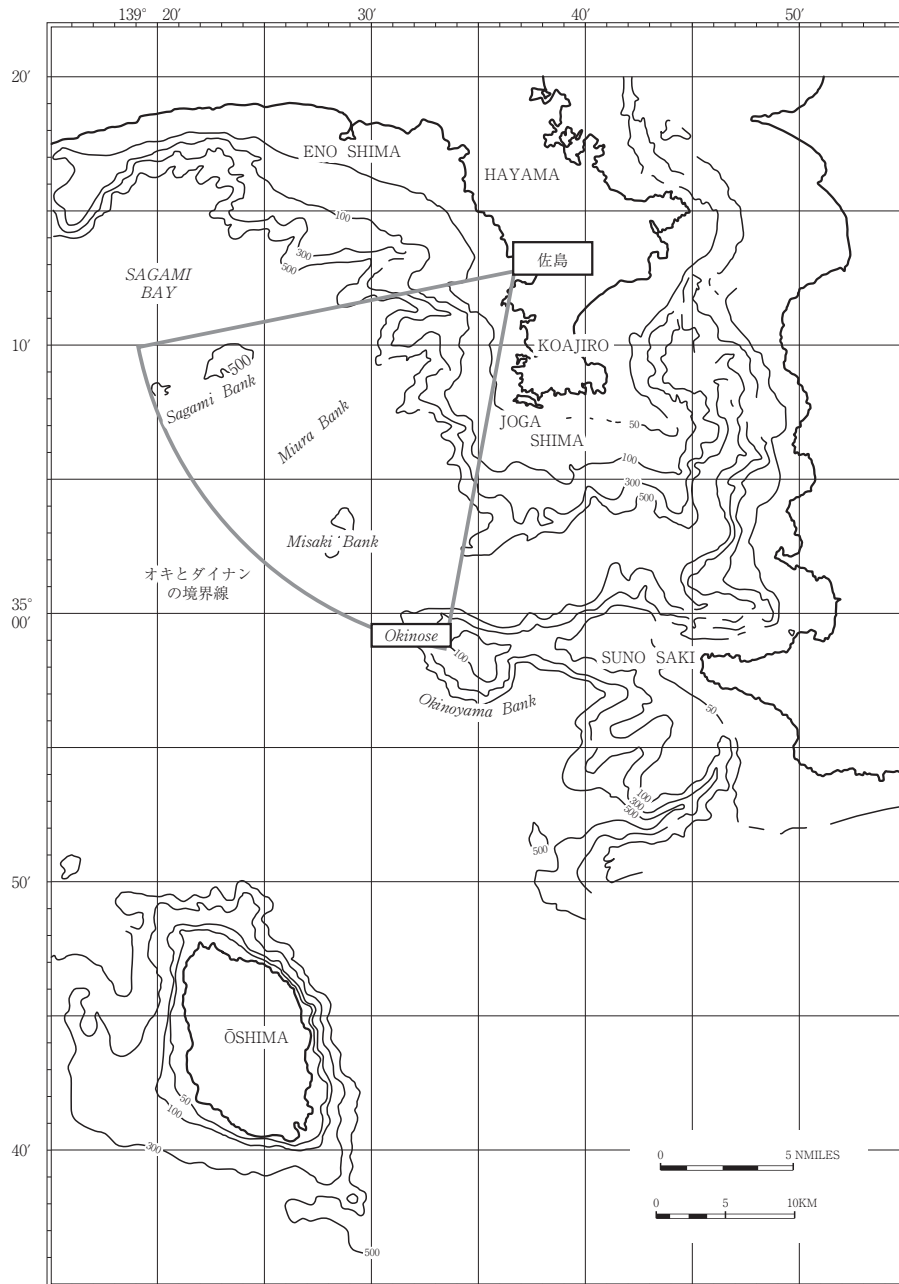
また、オキとキワの対比は、漁師の方向感覚とも関わる。佐島では海上の場所やネの位置を示すとき「東か西か、オキかキワか」といった言い方をする。南（南西）に海が広がり北（北東）に山を背負う佐島の漁師の場合、方向感覚として、東か西か、オキかキワか、といった2つの要素が重要となる。東・西は潮流に沿っての感覚であるといってよい。具体的には、東・西の方向感覚はニシッチョ（西潮）とヒガシッチョ（東潮）の認識に表れる。黒潮本流を基準にしたウワテッチョ（上手潮＝サカシオ：逆潮）とシタッチョ（下潮＝マシオ：真潮）とともに、ニシッチョ（西潮）とヒガシッチョ（東潮）は佐島では漁やそれに伴う操船には欠かせない潮である。

それに対して、オキ・キワは海岸線に向かって垂直方向（浅↔深）の方向感覚を示している。この方向感覚も潮流が関係する。ウワテッチョとシタッチョである。ウワテとは陸側、シタとは海側のことをいうからである。つまり、ウワテッチョは陸に寄りつく潮をいい、シタッチョは岸から沖に流れる潮つまり離岸流を意味する。

その意味では、佐島漁師の方向感覚は潮の流れに対応したものだということができる。当然、東・西とオキ・キワという2つの方向感覚は直交するものではない。それはオキ・キワの方向が水深をもとにしたものであり、必ずしも南北方向を示すものではないからである。

佐島の場合、キワは一部にハマ（砂浜）があるものの、基本的にはイソウミ（磯海）と呼ぶ岩礁帯になっている。岸近い浅場のうち、海底が岩場になっている海がイソウミで、その延長がネ（根）ということになる。イソとネの違いは、一般にいわれていることと同様に、干潮時になると水面上に岩が露出するところをイソ、干潮でも水面下にあるところをネというが、実際には凹凸があるためイソと呼んでいても干潮時に一部だけ水面上に岩が露出するだけで多くは水面下にあるよ

図3 相模湾東部（海図）



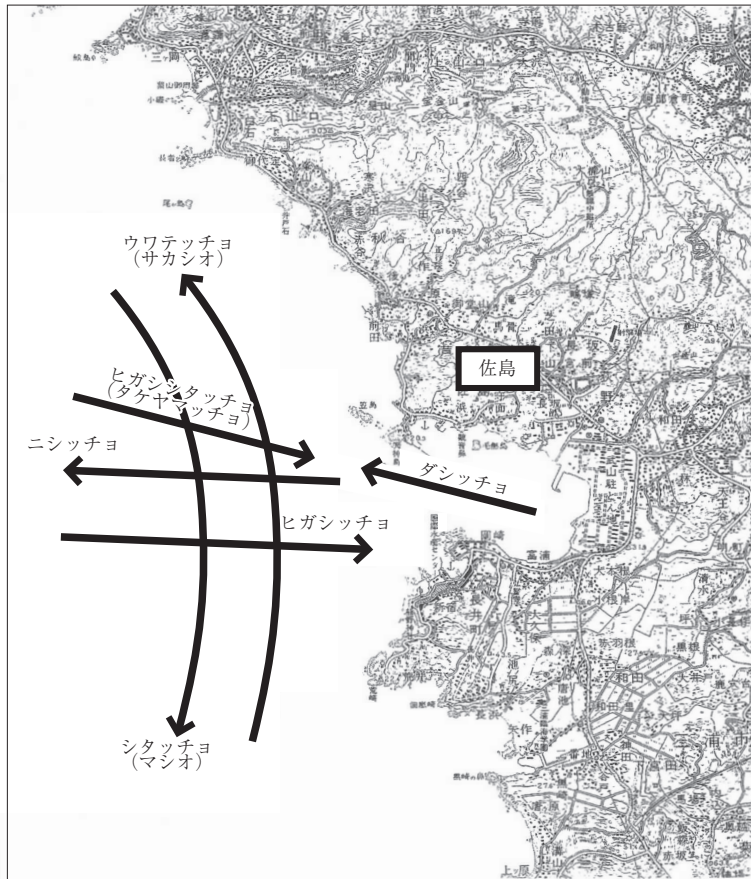
※海図「相模灘」（海上保安庁作製）を下図とする。

うなところも指している。また、ネといった場合には、とくに岩場に海藻が繁茂しているところを指す。

佐島の地先にある毛無島・天神島・笠島などの小島はどれもイソウミにあるものとして認識され、その周辺は磯漁の漁場として利用される。そのためこうした島の回りのイソはシマと呼ばれることもある。この場合、シマとイソは同義ということになる。それに対して、オキの彼方（ダイナン）に臨む大島など伊豆七島の島々はオキノシマ（沖の島）と称され、地先の小島とは峻別される。当然、一般には遠く望むだけで漁場とすることはない⁽⁵⁾。

キワとオキの認識の違いは、漁の活動に明確に現れる。キワは佐島においてもっとも中心的な漁法であるミヅキとモグリ⁽⁶⁾がおこなわれる空間である⁽⁷⁾。これらの漁はいわゆる磯漁で、佐島ではコシヨク（小職）と称される。ただし、小職といった場合、単独では主たる生計維持法にはならない漁というイメージもあるため、漁師の中にはモグリは小職に含めない人もある。そうした小職

図4 佐島のシオ



に対して、オキは一本釣や延縄のようなオキシヨク（沖職）が中心となる。

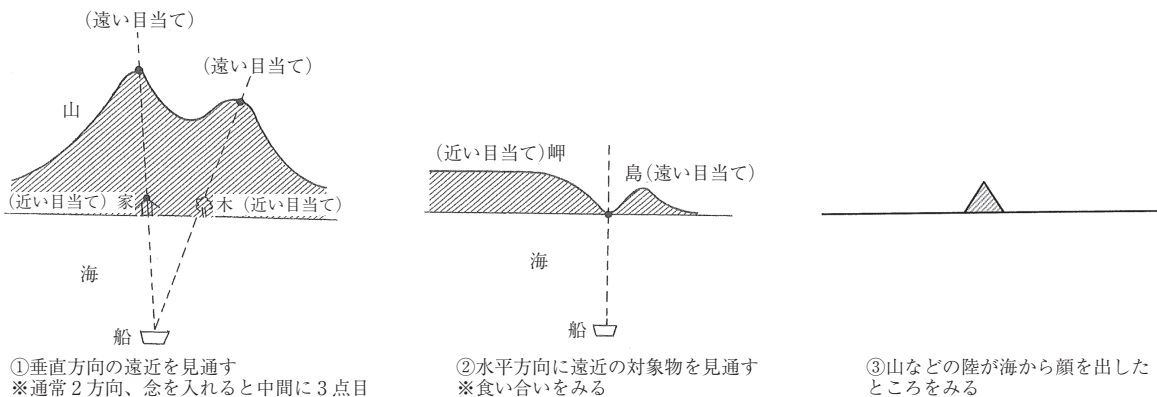
ミヅキ漁は、船上からメガネで水中を覗き、竿で魚介を採取する漁であるため、当然漁場は竿の長さに制約される。竿はカシの棒を継いで長くしてゆくが、7～8mが限界である。また、モグリはミヅキ漁がおこなわれる程度の水深を中心に、どんなに潜っても水深15ヒロ（20～23m）が限界とされる。

モグリの限界がいわばオキとキワとの境界とされ、それは後述するように、もっとも陸地から遠いところに設定されるヤマアテの線（図11：オイデヤマ）に一致する。それが水深15ヒロ（20～23m）ということになる⁽⁸⁾。

ミヅキやモグリに対して、オキでは個人漁としては一本釣や延縄のような釣漁がおこなわれる⁽⁹⁾。釣漁および釣漁師のことを釣職という。一本釣・延縄ともオキでおこなう漁のため、沖職とも称される。一般にキワにいる魚類は種類に限られるが、オキにはアマダイやマダイなど商売になる（稼げる）魚が多くいるため釣漁にはオキが適している。そうした沖職に対して、キワのミヅキやモグリはアワビ・サザエなどの貝類やイセエビ、タコなど、魚以外のものを主たる漁獲対象とする。中でもアワビはもっとも商品価値が高く磯漁の中心的な漁獲対象となる。

民俗空間ではオキのさらに先をデーナン（ダイナン）またはデーナンパラという。佐島の漁師は三浦半島で最高峰の大楠山（274m）をタカヤマ（遠い目当て）としてヤマアテ⁽¹⁰⁾の基点に用いるが、陸地から遠く離れるとそれが海中に没して見えなくなる。そうなるとデーナンにあるとされ

図5 ヤマアテー3つの方法一



る。佐島の場合でいうと、集落と伊豆大島を結んだ線のちょうど中間地点にあるオキノセ（図3）あたりまで外洋に出ると大楠山は海中に没することになる。

大楠山がなくなると三浦半島の岸は見えなくなること、つまりヤマアテに頼って海上での位置確認ができなくなったことを意味する。櫓に頼る木造船の時代、佐島の漁師は陸地が見えない沖合まで出るとは不安であったとされる。急激な気象の変化を避けるため港へ戻ろうとしても時間がかかってしまうこと、またヤマアテができなくなるところまでくると風や潮が強くなり方向を見失いやすくなってしまったためである。そのため、佐島の漁師はダイナンに「大難」の文字を当てて理解している。

ダイナンの漁場のひとつにセンバというネがある。房州（房総半島先端＝安房国）の沖合、伊豆大島との中間にあるネである。周囲は水深 200 m 以上と深く、そこだけが孤立してタカネ（高根）になっているため多くの魚が集まる。そのため、外洋性のカンパチやマグロ、カツオといった商品価値の高い大型魚の好漁場となる。しかし、センバは「千波」という字が当てられるように、漁船を飲み込むような大波が幾重にも重なってやってくる場所だとされる。そこは別名をゴケバともいい、「後家場」の字が当てられる。まさに多くの漁師がそこで遭難し、後家（未亡人）が多くできるからだと言われる。

また、ダイナンは岸からは離れていても岸辺に影響を与えていると佐島では考えられている。とくにアビキと呼ぶ高潮が岸辺に押し寄せるのはダイナンの水が引いたためであるとされる。その意味で、ダイナンは海付きの村の人々にとっては実際に行く機会はなくとも、えもいわれぬ怖さを持って存在する民俗空間である。

そのように、「大難」と解され、人々が暮らす「この世」「現世」に遠くから悪影響を及ぼす存在としてのダイナンは、まさに「あの世」「他界」へと通ずる境界としてたえず潜在下に意識されていた。

2) 海底地形の民俗分類

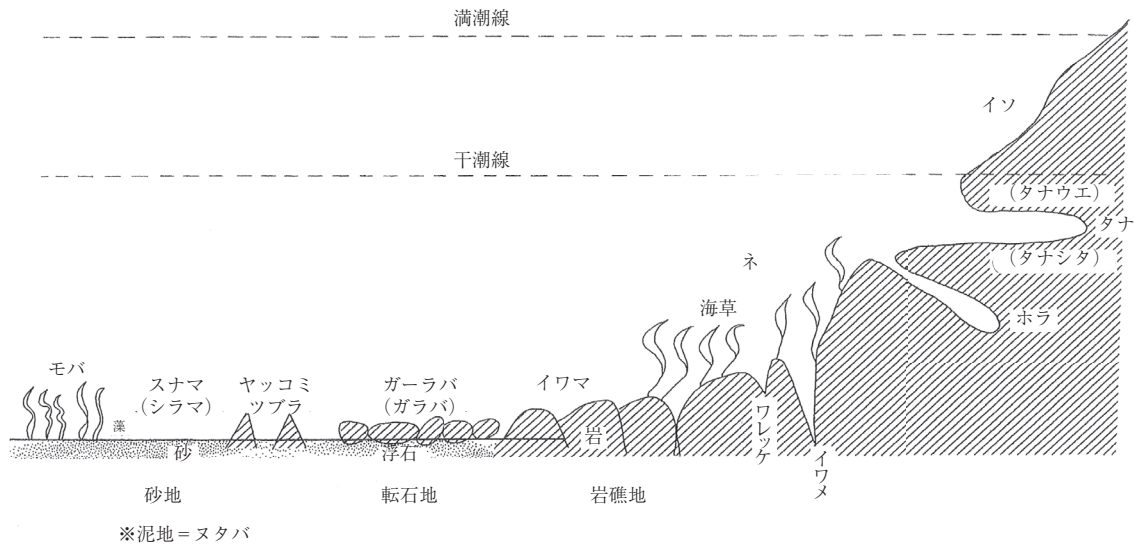
海の民俗空間のうちでもとくにキワは生業の場として重要な意味を持つ。そのため、キワの利用は多様なものとなる。そのことを端的に示しているのが海底の認識である。キワの海底地形はさまざまに民俗分類され、かつ命名されている。そのことはキワにおいては海底地形が漁場として頻繁に利用されてきたことを物語っている。また、命名の語彙はその利用の有り様を如実に示すものとなっている。表1は、海底地形の民俗分類と名称およびその特徴（漁との関わり）を示したものである。

表1によると、海底地形を示す語彙は、①微地形を示す語彙、②ネの状態を示す語彙、③大地形を示す語彙の3つに分けることができる。前述のように、佐島はキワにおけるモグリとミヅキを基軸とする磯漁が生業の中心となるだけに、前二者に関する語彙は豊富かつ詳細である。一方で、期間は限られるが、一本釣りにオキに出掛けることもあるため、カテのような大地形についての知識も持っている。

海底地形の認識についてはその特徴として2つのことが言える。

a. キワはオキに比べ、海底の認識は具体的かつ詳細なものとなること。キワはほぼ全域が漁場として利用されるため、微細な生業利用を反映して、さまざまに微地形が類別化されている。つまりキワでの認識はほぼ全域にわたり面的な広がりをもってなされている。それに対して、オキは広大な空間でありながら漁場として利用されるのはごく一部で、それがまばらに分布する。そのため、オキではネ（漁場）として認識度の高いところがある反面、ほとんど認識の対象とならないところがその周囲に広がることになる。つまりオキでの認識はパッチ状に点としてなされることになる。

図6 海底地形の民俗分類



b. キワにおける認識は海底に特化して2次元的なものになるのに対して、オキでの認識は海面・海中・海底というように3次元的なものになること。これは、キワではモグリ・ミヅキ、オキでは延縄・一本釣・各種の網類による漁がなされることに象徴されるように、漁撈を中心とした生業利用のあり方を反映している。またオキの先にあるダイナンは漁師の精神世界や他界観とも関わるものとなる。つまり、キワ-オキ-ダイナンと見てゆくと、キワの方向へ行くほど海域の認識は海底に特化されつつ面的な広がりを持ちつつ詳細で具体的なものになるのに対して、ダイナンの方へ行くほど海域の認識は次元を越えて抽象的になり精神世界と関わるものとなってゆく。

aとbとを分ける重要な目安となるのは、直接に海底を視認することができる範囲(水深)かどうかということにある。具体的には15ヒロ(20~23m)がオキとキワとの境界となる。そのとき、キワとオキでおこなわれる漁撈活動がそうした違いを生み出す背景にある。つまり、キワはモグリやミヅキといった漁撈活動をとおして直接的に視認される空間となるのに対して、オキは本来は不可視の空間でありながら一本釣や延縄といった漁撈活動を介して間接的に把握される空間となっている。

表1 海底地形の民俗的認識

地 形	特徴・説明（民俗的認識）
1. 微地形を示すもの	
イソネ (磯根)	イソとネを総称してイソネと呼ぶ。イソネは一般に岩礁地を指しており、意識の上では、砂地を示すハマおよびスナマと対照される。水深で分類するなら、イソがハマ、スナマがネにそれぞれ対応する。磯漁一般の漁場とされる。
イ ソ (磯)	干潮時に水面上に岩が出るところがイソ、干満にかかわらずいつも水面下に潜っているところがネである。イソは常時水上に出ているところと干潮にならないと水上に出ないところに分けられる。前者をオカ（陸）、後者をイソと呼び分けることもある。イソではイソドリまたはオカドリと呼ぶ漁撈採集が主に女性によりおこなわれる。商売の漁で用いられるイソだけが命名される。
ネ (根)	ネは岩礁でしかもカジメなどの海藻が生えているところをいう。タナやホラが多くあり、アワビやイセエビなどネに付く魚介類の住みかとなるため、キワではモグリとミヅキの主な漁場として利用される。そのため、ネは漁場と同義で使われることが多い。陸地に近いほど細かくネは分割されて認識・命名されているが、反対に岸から離れるほどネの認識は大きくなる。
タカネ (高根)	ネのなかで周囲に比べ高くなっているところ（つまり浅くなっているところ）をタカネと呼ぶ。ひとつのネの中の内部分類に使われることが多い。
ノテンバ (野天場)	タカネになっている頂上部分の平らなところをノテンバという。20 m 前後の深いところでは、本来暗いところを好むアワビがノテンバに出てきている。それをとくにノテング（野天貝）といい、おもにモグリ（オキモグリ）で捕る。
ハタフチ (端縁)	ネの端を指すが、具体的にはネとシラマの境界をいう。イセエビやサザエを捕るため、イソタテアミ（エビアミ）と呼ぶ底刺網がハタフチに立てられる。根掛かりを少なくするため底刺網は曲がりくねったハタフチに沿ってうまく入れる必要がある。
ハ マ (浜)	主にウミとオカとの接点にできる砂浜地を意味する。防波堤が整備される以前には船はロクロでハマに巻き上げられていた。また、漁具を収納するための浜小屋が作られ、網の手入れや繕いなども日常的におこなわれる。また、漁師がぶらぶらしつつ他の漁師と話しをしたりする社交空間でもある。一般に「九間三つ取り」といわれるように漁師の家は狭いため、ハマには各自の作業小屋のほかにも自然と漁師が集まる場所が設けられている。6 か所あるハマにはすべて名前が付けられており、漁師の認識ではウミというよりはオカからの延長として捉えられている。
シラマ (白間)	シラバまたはスナマともいい、砂地を指すが、とくにネとネの間において砂が溜まったところをいう。ただし、シラバは単なる砂地の意味で使い分けることもある。シラマは藻の有無で区別される。藻が生えているところがモバで、生えていないところがシラマとなる。藻がないと船上からは砂地が白く見えるのでシラマという。佐島の場合には、主にイソネ地帯となっているため、シラマはそれほど面積的には大きくはなく、イソネの合間に細長く存在する事が多い。そのため、キワのイソネを区画するとき用いられ、シラマを境にイソネが区分けされ違った名称になっていることは多い。 スナマにはあまり魚が少ない。そのため、佐島では「ネは商売になるが、スナマは商売にならない」という。イソネに比べると、一般にシラマやヌタバは魚が少ない。そのため漁場はイソネが中心となるが、ヒラメやカレイのようなシラマやヌタバを好む魚もいるためそうした魚の漁はおこなわれる。
イワマ (岩間)	スナマに対して岩ばかりのところをイワマという。海藻が密生すると、イワマはネとなるが、スナマはモバとなる。
コイワ (小岩)	スナマにイワマが少し入り込んだところをコイワと呼ぶ。
モ バ (藻場)	モバは砂地から藻が直接はえているところをいう。そのため、佐島ではイワマに生える海草とモバの藻は区別される。モバの藻はアジモ（和名：アマモ）と呼んでおり、大（4-5 m あり、タカモ、ナガラモ、タカネモとも呼ばれる）・中（1 m 程度）・小（30-40 cm）というように大きさで3種に民俗分類されている。 小田和湾奥のように、タカモの生えているところは川の水が入り込んでいてとこで栄養に富んでいる。そうしたモバは、一部、アジモが生えるところ以外はあまり商売（漁場）とはならない。しかし、魚の産卵場となり、また孵化した稚魚の隠れ場となっていた。とくにクロダイ、メバル、カワハギ、イセエビ、スズキ、イワシ、アカイカ、クルマエビ、アオリイカといった魚介類の稚魚や小魚が多くいた。そのため、そうしたモバがあるからこそ全体として佐島の魚を豊にしてくれたと漁師も感じている。 漁場としては、イソネに比べるとさほど大きな意味を持たないが、例えばアオリイカのような特定の魚種については重要な漁場となる。中程度のアジモが生えるモバがアオリ漁の目安となる。そこにアオリが産卵に来るからである。大きなアジモのところにもアオリは産卵に行くが、網がうまく仕掛けられないので漁にならない。小さなアジモはアオリが来ない。結果として中くらいのアジモのところは漁場となる。
モバタ (藻端)	モバの端の部分をもバタと呼ぶ。モバとスナマまたはモバとネとの境界をなす。モバタはイセエビの好漁場となる。夜、モバタに沿ってエビアミ（底刺網）を掛けイセエビを捕る。イセエビは夜行性で動き回るので網にかかる。
ガーラバ (がら場)	ガラバともいう。スナマとイワマのちょうど中間のような場で、砂地にガラ（一抱えくらいの大きさで、岩盤とは独立してある浮き石）がごろごろしているようなところをガーラバという。ネは主に岩場となっているのに対して、ガーラバは浮き石がごろごろした状態のため、ネに比べると海草が少ない。

地 形	特徴・説明（民俗的認識）
ツブラ （粒ら）	スナマのなかに突き出た岩をツブラという。そのようなところのネをツブネという（それと同様の発想から独立した小さなネを指すこともある）。または、スナマのなかにぼつんとできたイソネをツブラという。こうしたツブラにはカワハギの群れがつくとされ、ツブラを知っていることがカワハギ漁を左右する。
ヤッコミ （やっこみ）	スナマとネの間のようなところで、砂地から岩が点々と出ている状態をいう。
スタバ （沼場）	泥状になっているところをスタバまたはスタ（ヌマ）という。スナマやイワマと区別してスタバと呼ばれる。浅いところはスナマになっているところが多く、深さを増していくとともに所々にスタバができてくる。小田和湾の中心部はスタバになっているとされる。ただし、相模湾では、スタバはあまりオキにはない、オキとキワの間あたりにできる。スタバはあまり漁場とはならない。
2. ネの状態を示すもの	
タナ （棚）	イソやネで、岩がテーブル状に張り出してできる下の隙間をタナという。また、タナの下面をタナシタ、上面をタノウエと呼ぶ。タナにはアワビやトコブシがたくさん付くのでモグリにとっては大切である。とくに大切にしている自分のタナやホラをオカンバという。大きなタナにはアワビが多く、小さなタナはトコブシが付く。佐島のネではハサキにタナやホラが多く、モグリにとっては一番のネとなる。
ホラ （洞）	タナに対して、岩が深い穴のようになっているところをホラまたはホラバと呼んでいる。ホラは横穴が多いが、中には縦穴のものもある。縦穴の場合、たいていは砂が積もってしまうので、ホラのままであるところは珍しい。ホラにはアワビもいるが、とくにイセエビが多い。ただし、ホラの場合には、多くは規模が小さいか間口が狭いため人が出入りできずあまり魅力的な漁場とはならない。中には人が入ることのできるほど大きなホラもある。それをオオホラという。オオホラに入ることはモグリにとっては危険なことである。身動きが取れなくなったりウツボに咬まれたりするためである。そのかわりアワビなどの魚介は多く、若いときにはあまり人がいかないオオホラばかりを狙ってモグリをした人もいる。それは体力があり怖いもの知らずの元気なとき一時だけで、少し体力が落ちてくると怖くてできなくなるのが通常である。
イワメ （岩目）	タナと地形的には似ているが、大きな岩の裂け目をとくにイワメと呼んでいる。イワメはアワビが良く付く。一度とつてもすぐにまた付くため、繰り返しモグリに通うことができる。そうしたところをモグリはそれぞれ心得ていて得意とするイワメを持っている。そのため、そうしたイワメを「俺（自分）の財布だ」と表現する人もいる。
ワレッケ （割れっけ）	小さな石の割れ目をいう。トコブシが挟まるようにして付いている。
3. 大地形を示すもの	
カテ （かて）	佐島のある三浦半島の西岸（相模湾）は80尋（120m）くらいまでの水深のところは緩やかに深さを増してゆくが、水深80尋より沖に行くとき急激に深くなる。その水深80尋あたりの境目をカテと呼んでいる。または、80尋くらいまでの緩やかに深くなっているところをカテと呼ぶ。水深30尋（45m）からカテまでがナワ（延縄）の漁場として使われる。
キワ （際）	イソ・ネ・ハマを総称する空間。水深15尋より浅いところをいう。海底の状況というよりは、オキやダイナンとともに民俗空間として佐島に暮らす人びとに認識されている。おもにモグリやミヅキといった磯漁をおこなう領域とされる。そうしたキワの漁をコシヨク（小職）と総称する。
オキ （沖）	キワに対して用いられるもので、キワとダイナンの間にある民俗空間。水深15尋よりも深いところをいう。オキでの漁は、キワの小職に対して、沖職と総称されるが、おもに一本釣と延縄がおこなわれることから釣職ともいう。
ダイナン （大難）	オキの先にある民俗世界。三浦半島の陸地が見えなくなるまで沖に出たところをいう。木船の時代は、ダイナンまで出ると陸地が見えないだけでなく、潮や風がきつくなり嵐に遭うと方向を失って遭難の危険が高くなる。そのため、佐島の漁師は「大難」の字を当てる。また、アビキ（高潮）をもたらすものとして恐れられる。ウミの世界において、キワとオキが生産域であり、人の暮らす「この世」とするならば、ダイナンは非生産域で「あの世」に通ずる海域ということになる。海域を示す言葉であるとともに、漁師の他界観を示すものとなっている。

4. ネの認識

1) ネの所在—キワとオキのネ

ネとは岩礁地で海藻の生えたところをいうが、それは同時に漁場を意味する。その対局の存在として認識される海底地形がシラマである。シラマとは砂地のところで、一般に漁場には向かないとされる。とくにアワビなどネに棲息する魚介類を主対象とするモグリやミヅキにとって、砂地は漁場としての価値をほとんど持たない。でありながら、漁とはまったく無関係かといえばそうではな

図8 ネの認識と区分—3つの方法—

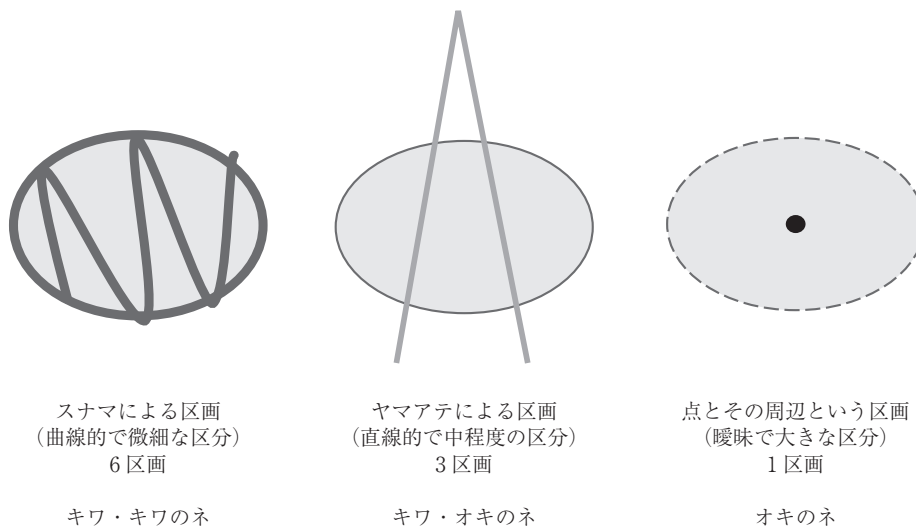


図9 佐島のネ—名称—



なっているとしても水深があるため光が十分に届かず海藻類はまばらにしか生えずネとはならない。

一般には、ネは岸に近いほど細かく区画され、それが連続的かつ面的な広がりをもって認識されている。その場合、ネはシラマ（砂間）を境にして区別される傾向にある。つまりキワの中でもキワ・キワ⁽¹¹⁾のネはシラマにより画されながら、ほぼ隙間なく連続しているといつてよい。なお、それほど多くはないが、シラマが面的な広がりを持つと、その砂地からネが独立した状態で突き出ていることがある。その場合、砂地の中にネが粒状に存在するというこで、ツブネ（粒根）と称される。

そのようなシラマとネとの関係にあるとき、ネには命名されても、けっしてシラマには命名されない。ネの区画に用いられる線状のシラマはもちろんのこと、ツブネの周りに広がるシラマにおい

でも同様である。このことを見ても、海底地形において命名されるのは漁場となる空間のみで、かつそれは佐島の場合はネに限定されていたといえよう。つまりモグリやミヅキを基幹とする磯漁の村にとってネは漁場として重要であるが、シラマは漁場たりえないことになる。

何らかの理由でシラマを特定する必要がある場合には、たとえば「○○（ネの名前）の東のシラマ」というように、隣接するネの固有名を挙げて、そのネとの位置関係で示されることが多い。その意味で

シラマはネに付属するものという意識が潜在しているといえる。一枚の絵にたとえるなら、ネが主題であるのに対して、シラマは額縁ないしは背景ということになる。

また、キワの中でオキに近いところのネ、つまりキワ・オキのネはヤマアテで外形と領域が画されている。キワ・オキのネはキワ・キワのネに比べると大きな領域を持っている場合が多い。この水域は、水深 20 m にまで達するため、モグリでもどうにかオキモグリだけは対応できるが、キワモグリやミヅキはできない。そのため、ネの中に走るシラマを手がかりにネを細分することはできない。そのため、外形と領域を示すにはヤマアテを用いるしかなく、かつその領域はキワ・キワのネに比べると大きなものにならざるをえない。

以上のキワに対して、オキやダイナンにもネは存在する。ただし、漁師の認識の上では、オキのネはキワとは違った形で存在する。ひとつひとつのネは他のネと接することなく独立し、広い範囲に疎らに点在する。また、ひとつのネは、規模ではキワのものよりも大きい。オキでは深みから突出した部分がひとつの大きなネとなっており、そのために認識として、ネは点として捉えられる傾向が高い。つまり沖のネはまずはいったん点として捉えられ、続いてその周辺が領域化されており、全体として外縁部の境目が定かではない。

漁師はオキのネは大きいという。しかしそれは逆説的であり、オキのネが実際に大きいのではなく、身体能力的また漁法において人の認識が及ばないためネを細分化して認識することができないのである。オキのネの場合、キワのネとは違ってシラマの入り方による微細な区画ができないため、ひとまとまりの大きなものとして捉えるしかない。沖のネが大きいものと認識されるのは、視認による区画ができないためであり、結果として漁師自身の認識が大きくならざるをえないのである。

漁の種類によりネの把握には差がでる。モグリやミヅキといった磯漁を主とする漁師（佐島では大多数を占める）はキワにあるイソやネの把握は詳細を究めるが、オキの一本釣や延縄を専門とする沖戦の漁師はそれが大雑把となる。アグリ網やキンチャク網など巻網漁をする漁師はさらに大雑把な認識となる。とくに早い段階から最新の機器を備えた巻網船ではネに関する個人の民俗知識は必要とされることはない。それに対して、沖合や遠洋のネについての知識は、モグリやミヅキの漁師より、一本釣・延縄や大型巻網の漁師の方が多く持っている。ネの認識は、キワ・オキ・ダイナンといった立地に応じて、漁に用いる頻度に比例して密なものとなるといつてよい。

2) キワのネの類型—オーネとコーネ—

佐島ではキワのネは主にオーネ（大根：大きなネ）とコーネ（小根：小さなネ）に分けられている。ただし漁師により認識されるネの大小はあくまで相対的なものにすぎず、絶対面積を示すものではない。その意味で、オーネとコーネの2類型は日々の漁活動により培われた民俗分類であ



写真2 佐島のイソネ

表2 キワの2類型 —キワ・キワとキワ・オキ—

	キワ・キワ	キワ・オキ
海底環境	イソネ (10 尋以浅)	ネ (10 尋以上)
ネ把握の基本	視認による直接的な把握	漁撈活動による間接的に把握
ヤマアテの地位	補助的な意味しかない	主たる認識法
ヤマアテの方法	陸上景観による確認は少ない (1 方向の確認)	陸上景観による確認は大きい (2 方向の確認)
海中景観の認識レベル	海中景観の認識レベルは微細	海中景観の認識レベルは大雑把 ヤマアテでネの中を細分化する必要

*キワ・キワやキワ・オキといった民俗用語があるわけではなく、筆者が便宜的に付けた名称である。

る。そして、そのとき重要なことは、オーネとコーネという分類は同時にキワを認識の上で二分するものとなることである。ネに関する認識のあり方から、キワはキワ・オキとキワ・キワに2区分されることになる⁽¹¹⁾。そして、重要なことはコーネとオーネとではネの領域設定の仕方が異なっていることである。

コーネはキワの中でも岸に近い方(キワ・キワ)にある。とくには島などの陸地に接続して存在するネである(図10)。その特徴として、キワ・キワのネは直接的にメガネで海底を見ておこなうミヅキや海底まで潜水するモグリ(とくにキワモグリ)に多用されることにある。つまりコーネは漁活動によりたえず直接視認されている空間といえる。そのため、見た目において区画しやすいシラマにより区分されることになり、結果として細分化されてコーネになる。反対に言えば、実体視に頼る磯漁に多用されるからこそ、より細やかな認識が可能になったといえる。

それに対して、オーネはキワの中でもオキ近く(キワ・オキ)にある。具体的には、カサゴネ、シラネ、ハサキを指している(図10)。モグリではオキモグリに、また網類ではおもにエビアミ(底刺網の一種)に用いられるネである。それはヤマアテにより領域が設定される。そのため、実際

図10 オーネとコーネの区分

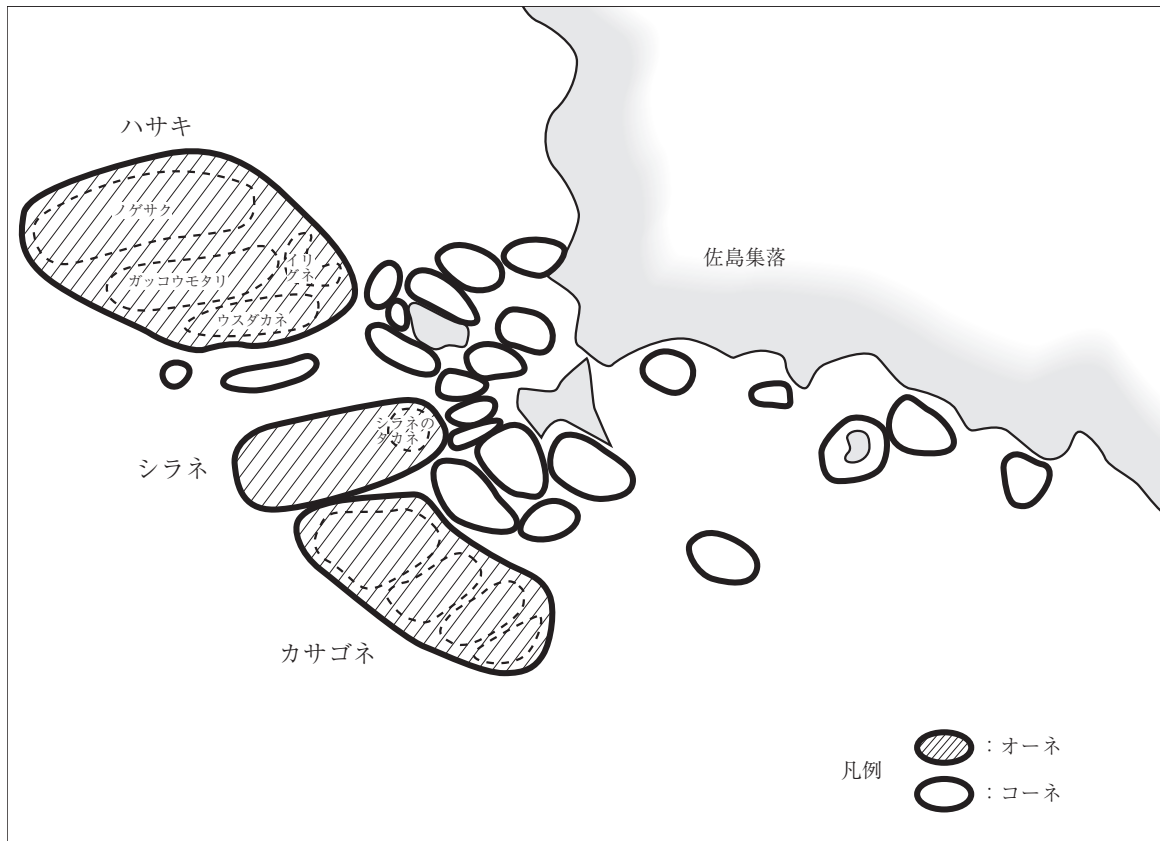
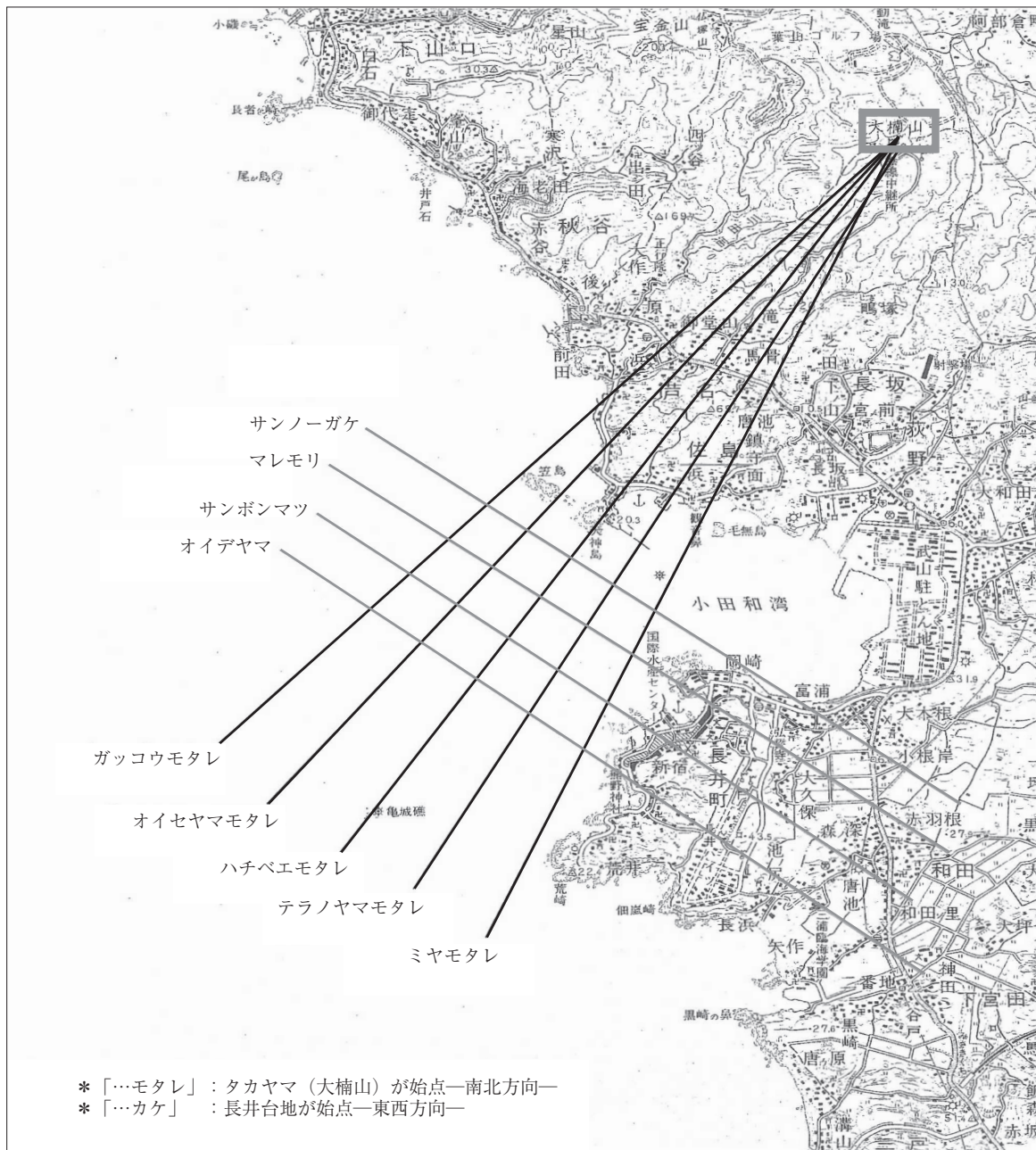


図 11 ヤマアテの基本軸ーオオヤマー

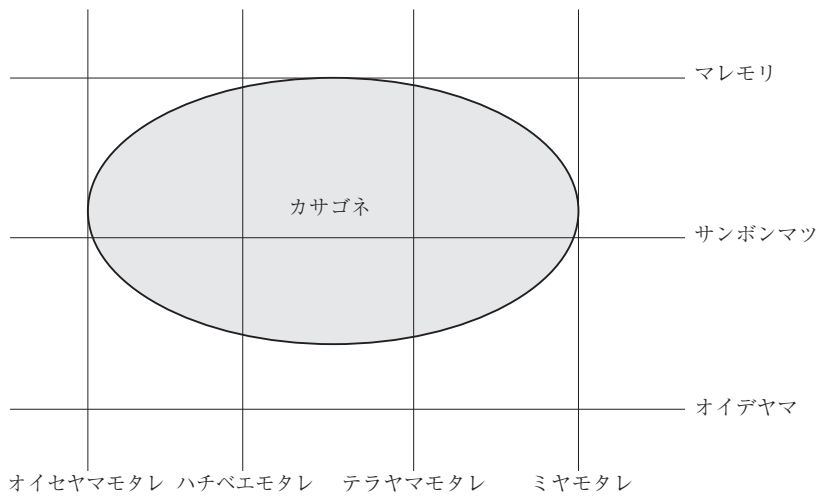


に人の目で視認されるコーネとは違って、細長く走るシラマのような微細な地形を利用してネを細かく分節化することはない。また視認により細分化しようにも深いためにできない。コーネのものとも大きな違いがそこにある。

そうしたオーネを漁に用いるときには、ヤマアテによりオーネの内部にいくつかの漁場が設定される。オーネは単独の漁場としては広すぎるためである。その場合、図 11 にあるように、沖合における基本のヤマの採り方、つまり大楠山方面（東）を見通す「〇〇モタレ（モタリ）」と長井台地方面（南）を見通す「〇〇カケ」を組み合わせる。

オーネはヤマアテによりその領域が示され、かつ内部が分割される。たとえば、カサゴネは図 12 に示すように、ミヤモタレを東の端、オイセヤマモタレを西の端とし、中をテラノヤマモタレとハチベエモタレの 2 線が通り、全体の領域が示される。と同時に、南北方向では、南辺をオイデヤマ（正確にはオイデヤマとサンボンマツの中間線）、中間をサンボンマツ、北辺をマレモリで画さ

図 12 ネの位置と外形の認識—キワ・オキのネ（カサゴネ）の場合—



れている。したがってカサゴネはヤマアテにより漁場が大きく6分割されることになる。そう考えると、コーネとは違って、オーネの場合は、ヤマアテによりその内部を分節化できるため、コーネのようにシラマを用いて分節化し、それにわざわざ別の名前を与えて記録しておく必要はなかったということもできよう。

また、ネの中で一部が高く

なっていたりすると、その部分だけ「○○（オーネの名前）のタカネ」と部分名称を付けたりする。同じようにネの沖側にある方を指して「オキ○○ネ」といったりする。これもいわばネの部分名称と捉えることができる。

たとえば、ハサキでは、その内部が3分割され、ウスダカネ・ガッコウモタリ・ノゲサクと命名されている。ウスダカネはまさにハサキの中でも一段と浅くなっているところを指し、ガッコウモタリはヤマアテの線と同じ名称である。図10に示すように、ハサキの内部を3分割しているその形状は明らかに大楠山を見通したヤマアテの線により領域が区画されている。つまり、オーネは漁場として利用しようとするときには、外形を知るためのものと漁場のポイントを絞り込むためという2段階のヤマアテが必要となる。

このようにキワ・オキのオーネを漁に利用するときにはヤマアテを駆使するが、だからといってそのことがオーネにはシラマがないことを意味するものではない。実際にはオーネにも、キワ・キワの領域と同様、その内部にシラマが走っている可能性は高い。現在オーネとされるものでも、もしキワ・キワの水域にあってモグリやミヅキに利用されるなら、そのネが実視されることでシラマによる細分化が進み、その結果として複数のコーネに分割されることになるであろう。

オーネとコーネとの相違点として重要なことは、地先の村による占有意識に違いがみられることである。コーネはマエハマ（前浜）の意識が高いところである。マエハマはその村に帰属し占有される漁場空間である。佐島にとってはサジママエ、芦名（佐島の隣村）にとってのアシナメ（アシナマエ）がそれに当たる。そこは特別の歴史的出来事（後述）がない限り互いに犯してはならない漁場となる。

それに対して、オーネは入会の意識がある。位置としては両村のマエハマの先（沖側）にあるためそうなる。ただし、佐島と芦名とでは意識に大きな差も認められる。佐島はハサキ・シラネ・カサゴネというオーネは佐島のマエハマに準じるものとして優先権を主張し、実質的には佐島漁師が占有している状態にある。その根拠としては、それらのネは佐島の民俗空間でいうキワにあるためである。つまりキワはマエハマという意識を強くもっている。

それに対して、芦名の漁師にとっては、もしそのネで漁をおこなったときには佐島漁師との諍いを覚悟しなくてはならない（そのため実質的には使えない）けれども、オーネは佐島のマエハマではなく入会であるという意識がある。

芦名にはオーネとコーネという民俗分類はない。芦名では、自村のマエハマにハサキなどのネは（佐島でオーネに分類されるネ）は含まれないからである。その意味で、オーネとコーネという民俗

分類は佐島においてのみ意味を持つ民俗分類であり、佐島にとってキワ空間はマエハマと一致し、実際の漁活動の必要からその内部分類の概念としてオーネとコーネは作られたと考えられる。

3) 認識の個人差とオカンバ

ネに関して認識の個人差を生み出す要因は、漁場としての利用頻度にある。よく行く海域ほど細かな認識をしているのに対して、あまり行かない海域は大雑把となる。そのため、モグリを得意とする漁師は、キワのネについて沖職の漁師に比べるとはるかに詳細な知識を持っている。また、同じ磯漁師であっても、やはりオカンバと呼ぶ得意の場が異なるため、おのずとキワの中でもネの認識に粗密が生じ、それが漁活動の個人差として表れることになる。

ネの利用に関する個人差を生む前提として、ネの微細な差異がある。漁をおこなうには正確にネの位置を知ることが重要であるが、さらにはそのネのさまざまな性格も知っていなくてはならない。同じくネと呼ばれるところでも、岩礁の様子で区別される。一例を挙げれば、岩が多く切り立つようなところはコワイ、岩が平らなところはヤワラカイとそれぞれと表現される。コワイところは魚介やイセエビも多いが、根掛かりしやすくエビアミ（底刺網の一種）のような漁はしづらい。それに対して、ヤワラカイところはとくにヤッコミと呼ばれエビアミには良い漁場とされるが、それは岩場に凹凸があまりないため獲物はそれほど多くはないが底刺網を掛けても引っかかりが少ないからである。ヤッコミという言葉は主にエビアミの漁師が使う言葉であるとされる。

さらに、岩の凹凸だけでなく、漁をしようとするときにはとくに岩の向きも重要となる。岩のどがった先がどの方向に向いているかを把握しておく必要がある。とくにエビアミを仕掛けるときにはそれを正確に知っておかないと岩に引っかけて網を駄目にしてしまうことになる。たとえば、一般に佐島のネの場合、岩は鎌倉の方を向いているが、ところによって富士山や長井台地、天城山に向いて傾斜しているものがある⁽¹²⁾。

ネには微細かつ多様な差異があるからこそ、個人の経験とその記憶が大きな意味を持つことになる。そして、それが漁師が自分専用の漁場と意識できるほど多様なオカンバの設定を可能にしたし、また漁活動に関する個人差を増大する方向へ作用したといえる。

4) シラマの意味

佐島には砂地をなすハマは集落前に見られるのみである。佐島には4つの町（チョウ：村組）が海岸線に沿って横に並んでいるが、その各町の前にハマがあり、それぞれ命名されている。たとえば芝町の前のハマはシバノシタというように、町とハマは対応関係にある。つまり4つの町に4つのハマが対応して存在する。そして、ハマには浜小屋が建てられ、また漁船が引き上げられる空間として、いわば私有地に準ずるものとして利用されている（ハマの前の海は漁港でその水上は船の係留場所となっている）。その場合、たいていは自分の属する町に対応したハマに浜小屋を持っている。意識の上では、ハマは明らかにオカ（陸）の延長として理解されている。

佐島のマエハマ（前浜＝地先の占有漁場）には海中において一面の砂地をなすところは無い。スカッポ（ネの名前）の周囲や毛無島の付近には一部に砂地が存在するが、それは海底地形としては例外的である。しかもそこはアマモやナガモクなどとよぶ海草の生えるモバ（藻場）となっており、明確にシラマとは区別されている。多くの砂地はネとネの間に線状にあるか、またはネを取り囲むように存在する。そうした砂地がシラマと呼ばれている。

シラマ自体は漁場としての価値は低いとされる。ヒラメやキスといった魚はいても主たる生業として漁をおこなうほどの生産量を上げることができないからである。ネの中にシラマが走っていた

り、またシラマの中にネが突出しているようなときには、ネとシラマの間にエビアミ（底刺網の一種）を張ってイセエビやサザエを捕ることができるが、それも根魚の漁と位置づけられる。

そうしたとき、キワ・キワ空間におけるネの形状や大きさを規定するものとしてシラマは大きな意味を持つ。ネの中にあつて砂地は船上からは白く見えることからシラマという。とくにネが黒く見えることとは対照をなす。

そうした色彩の対照があるため、ネの区画に用いられることになる。ただし、キワ・オキ空間まで行くと水深が20mほどになるため、船上から見て水底のシラマが判然としなくなる。そのため、シラマをもとにネを区画するのは陸地に接してあるキワ・キワ空間が主となる。

そのとき、重要なことは、ネの区画にシラマを用いることの前提として、日々の漁撈活動がある。佐島における基幹的な漁撈はモグリ（7～9月）とミヅキ（10～6月）の組み合わせにあることは前述の通りであるが、その漁はともに水中を覗き直接ネを観察することで成り立つものである。つまり、ネを目視する日々の漁撈活動において培われた経験がシラマをしてネを区画させることを可能にしたとあってよい。また、そうしてシラマを境界とすることで、図9に示したような詳細な漁場認識が可能になったといえよう。

キワ・キワのネの形状や大きさを認識するとき、シラマが大きな役割を果たす反面、ヤマアテは補助的なものに過ぎない。技術的にはシラマの目視とヤマアテはトレードオフの関係にあるといえる。

5. ネの名称

1) 固有名を持つ海底地形—ネの命名に関する原則—

ネには固有の名前が付けられている。キワではすべてのネが領域設定され、それぞれに命名されているとあってよい。キワ・オキのオーネとキワ・キワのコーネとでは領域設定の仕方が異なっていたが、命名にもそうした違いの影響は及んでいる。

キワ・キワのネについて、アシナメを例にしてみる。アシナメはアシナマエのことで、佐島の隣村である芦名の地先に広がる大きなネである。このアシナメの中には小根名として、ナンコウインシタ、ダイキョウ（マンション）シタ、ミズシリ、コツブネ、ナガノツブネ、オオツブネ、チトハナガタ、アワシマシタ、エビスト、アシガラ、クロデガエがある。

以上をみると、ネの命名法にはある程度の法則があることが分かる。その法則のひとつに「〇〇マエ」と「〇〇シタ」の使い分けがある。ともに陸地に接するネに附与される名称である。一方

表3 ネの名称 —佐島漁師の用いるネ—

民俗空間	ネの名称	対応する漁法
キワ	キワ・キワ コーネ トガクシノネ、ナガツバラノネ、モクヅリ、シバシタ、ヒガシワンド、マワシタカナ、シマノシリ、カラカサネ、ウマノセ、ニシノセ、スカッポ、ナカゼ、カサシマノシリ、カサジママエ、カツキネ、クロダイガネ、ミツイソ、アシナメ*2	イソドリ ミヅキ モグリ（キワモグリ）
	キワ・オキ オーネ ハサキ（ノゲサク、ガッコウモタリ、ウスダカネ、イリグネ） シラネ（シラネ、シラネノタカネ） カサゴネ（4つに細分*3）	モグリ（オキモグリ） エビアミ
オキ*1	アオヤマダシ、カンノンヅカダシ、イラッポダシ、ヘーダシ センバ（ゴケバ）*4	一本釣り 延縄

*1 オキとともに、その先のダイナンも含まれる。

*2 アシナメは芦名のマエハマを一括して呼ぶもので、芦名では細分化されている。

*3 ヤマアテ線で4つに分割されているが、名称不詳

*4 ダイナンのネ

で、「〇〇マエ」と言った場合、接する陸地は集落単位などある程度広い領域を指しており、結果としてそのネも大きなものとなる。それに対して、「〇〇シタ」といった場合は、接する陸地は水際にあるひとつの対象物（たとえばよく目立つ建造物）に限定されることが多く、結果としてそのネは小さなものとなる。この「〇〇シタ」がネの認識単位としては最小のものである。たとえば、アワシマシタというのは、淡島神社の前にある小さなネをさす。同様に、ダイキョウ（マンション）シタは大京マンション、ナンコウインシタは南光院のそれぞれ地先にある小さなネを指している。

そうした「〇〇シタ」と「〇〇マエ」の関係で注意すべきは、「〇〇シタ」のネは「〇〇マエ」のネに包括されるものであること、つまり「〇〇マエ」の中をさらに細分するときに「〇〇シタ」が用いられることである。「〇〇マエ」は集落単位のマエハマである場合が多く、「〇〇シタ」はマエハマを構成する一要素にすぎない。マエハマとネの関係は、歴史的な経緯として、漁協の合併という村落間の関係史を顕在化させる（後述）。

同様に、同じ陸地でも、佐島の地先に浮かぶ岩礁性の小島に接してあるネの場合には、その名前に「〇〇マエ」とつくと、佐島集落から見て島の手前（集落に近い方）にあるネを示す。それとは反対に、「〇〇シリ」または「〇〇セト」といった場合は、島の沖側（佐島集落に遠い方）にあることを示す。例えば、カサシママエは佐島集落から見える側の笠島に接してあるネを指し、カサシマノシリとは笠島の沖側にあるネのことをいう。「〇〇マエ」といった場合、〇〇が集落か島かで、まったく違ったものとなることには注意しなくてはならない。

以上が、キワ・キワのネについて、命名の基本としてあげられることである。一言でいうと、「〇〇シタ」や「〇〇マエ」のように、近接する陸地形や対象物との位置関係から命名されるネが多くあることに特徴がある。それに対して、キワ・オキのネにはそうした命名のあり方はない。その意味で、キワ・オキのネの命名には法則性らしきものは見あたらない。ただし、オーネのなかを小さなネに分節化するときには、オーネの領域化と同様にヤマアテが用いられるが、そのヤマアテの名称がそのまま分節化されたネの名称に用いられることがある点は、キワ・キワのネの命名にはみられない特徴であり、ヤマアテによる領域設定を反映した命名法であるといえる。

このほかキワにあるネについては、ほぼ以下の4要素またはその組み合わせにより命名されている。a. ネの形（例、ホソネ：細長い形のネ、ウマノセ：馬の背のような形のネ）。b. 規模（例、オオネ：大きなネを意味するネ）。c. 立地（例、ツブネ：粒根のことでシラマの中に独立してあるネ）。d. 属性（例、クロダイガネ：クロダイがよく付くネ）。e. 2つの要素の組み合わせ（例、コツブネ：小さな粒根）。ただこのほかに、解釈不能なネの名称（例、スカッポ）もあり、全体を律するような規則性はみられない。

次に、オキおよびダイナンについていうと、ネの命名について以下の特徴を挙げるができる。オキおよびダイナンでは、ネの位置確認の仕方を反映して、ヤマアテの名称がそのままネの名称として用いられているものがある。具体的には「〇〇ダシ」という名称がそれに当たるが、これについては次次項で詳述することにする。

2) 固有名を持つものと持たないもの—イソ、ハマ、シラマ、モバ、タナ、ホラー—

ネとともに民俗空間として認識されているイソ・ハマ・シラマ・モバについてもその命名のあり方についてみてゆく。

イソの場合、固有名が附与されるものは限られている。つまりイソは、漁場として良好なところのみ限定して名前が付けられている。「〇〇シマ」といった場合は、いわゆる島のように常時陸化したところを指すのではなく、干潮時に上部のみが水面上に出る漁場を言う。これはまさにイソ

に付けられた漁場の名称と言うことになる。例えば、ボウチョウジマと呼ばれるイソはタナやホラが多くあり、その名の通りボウチョウ（ミヅキ漁）やキワモグリをおこなうには良いところである。ただし、全体的にみるとイソに固有名が付くことはそれほど多くない。それはイソの場合、前述のように、イソドリのような自家消費のための漁撈採集はおこなわれても、“商売”の漁場として利用できる場所は限られているためである。

ハマについては、佐島に6か所あるすべてに固有名が付けられている。このうち集落の前のハマは4か所あるが、それらはシバノシタやヤトシバの名称が示すように集落に4つある町（チョウ：村組）の区域に対応しており、町名がそのままハマの名称として設定されている。前述のように、ハマは民俗空間としてはウミというよりもオカに近い存在であり、オカからの延長として捉えるべきで、その命名もオカの地名に準じている。

一方、同じ砂地の地形でも、シラマには固有名がない。前述のように、シラマを特定するときには、たとえば「〇〇（ネの名前）の東のシラマ」といったりする。これはネとの相対的な位置関係により場所を特定させるもので、固有名とはいえない。反対から見ると、シラマはネを分けるときになって、はじめてその存在が意味を持つことになる。ネはシラマにより区画され、ネが命名されるとき境界の役目を果たす。

また、基本的にはシラマに藻の生えたところを示すモバにも固有名はない。シラマと同様、たとえば、ミズイソの周囲に広がるモバを「ミズイソのモバ」というように、ネやイソを基点にしてその名称が付与されている。

タナやホラはネやイソに比べるとはるかに規模が小さい。片手が入られる程度のものから身体全体が入るものまで、その大きさには幅がある。昼間は暗所を好むアワビが潜む場となるため、アワビを主たる漁獲対象とする佐島のモグリ漁師にとっては重要な漁場である。ネやイソには多くのタナやホラが存在しており、タナやホラはイソやネの主要な構成要素と見なされる。ネやイソごとにホラの多いところやタナばかりのところなど特徴がある。単体としてホラやタナに固有名が付けられることはほとんどない。「〇〇ネのホラ」や「〇〇イソのタナ」と呼ばれるだけで、実際にはたくさんあるホラやタナのどれを指すものかは分からない。一般にネやイソが領域を持つ面として認識されるのに対して、タナやホラはあくまで点として認識されおり、モグリ漁師にとっては、究極は点であるホラやタナの集合体が面としてのネの実態であるといつてよい。

そうした中、例外的にオカンバ（秘伝の漁場）のように漁師個人がとくに大事にしているホラやタナには固有名が付けられることがある。オカンバはネやイソのような漠然としたレベルではなく、より具体的にタナやホラの単位またはそのいくつかの集合体で設定されることが多い。それだけにそれを名付けた人以外に場所を特定することは難しいし、また反対に同じ場所を他の漁師がオカンバに設定し他の固有名で呼んでいる可能性もある。オカンバの場合、その名称は、たいていシラマやモバと同様にネの名称に由来するもので、名付けた本人にしか通用しない。親子でも教えないとされるオカンバは他の漁師には秘密にされているものだけに、漁師個人に通用する名称であればよく、その意味で一般性のないごく私的な名称となる。

以上のように、漁場としての利用価値が海底地形に固有名をもたらす基本にある。キワにあつては漁場に利用されないネはないことを考えると、すべてのネには固有名があるといつてよい。それに対して、イソは漁場として利用されないところも多くあるため、漁場として利用可能なところのみ命名される傾向にある。ただし、オカドリ（イソドリ）のような漁業権を必要としない代わりに市場に出荷することもできない自家消費の範囲でのみおこなわれる漁（女の漁）はイソのあらゆるところでおこなわれているが、いわゆる“商売”となるミヅキやモグリ（男の漁）をおこなえる

イソは場所が限られている。そう考えると、イソの場合は、明らかに“商売”としての漁がおこなわれるところのみ固有名は付与されている。

シラマやモバには基本的には固有名はなく、必要に応じて隣接するネに由来して命名される。そして、ハマは陸上からの延長に位置づけられ、そのため集落の町名に由来する名称を有するが、その意味で海域としての認識や固有名は存在しない。

以上、ネ、イソ、シラマ、ハマなど海底地形に付与される固有名を見ていったが、そこからはひとつの傾向性を読み取ることができる。それは漁に対する有用度（漁の頻度）に命名の度合いは比例していることである。漁についての有用度が上がるほど、海底地形に名称が付与される率は上がり、かつひとつの固有名でくくられる領域は微分されてゆく。そしてその場合の漁とは、その地域における生計維持にとってもっとも重要な意味を持つミツキとモグリという磯漁が中心となる。つまり、海底地形の認識密度と特定の漁の有用度とは相関関係にあるといえる。

3) 「ダシ」というネの名前一命名へのヤマアテの関与一

以上は、キワにあるネを中心にオキに近いネまで、海底地形の命名について見てきたが、そのときヤマアテがどのように関与しているかでキワの空間はキワ・キワとキワ・オキとに2区分することができる。

基本的には、陸地に近いキワ（キワ・キワ）のネは、近接する陸地形や陸地対象物、またネ自体の形や立地、属性によって命名されていることがわかった。その場合、ヤマアテは漁場認識にとっては、補助的な意味しか持っておらず、もちろん命名に用いられることもない。それに対して、キワの中でもオキに近いところ（キワ・オキ）のネは、比較的大きな広がりをもって認識されているが、そのときヤマアテはネの外形を知るための方法として使われる。また、基本的なヤマアテの名称（オオヤマ）がそのままネの名称に使われることもある。

一方、キワの先つまりオキやダイナンにもネは存在する。このときのネとは海底地形を示すとともに、漁場と同義で用いられる。このネは、「〇〇ダシ」と命名されるものが多くある。それは、表3に示したとおりである。この〇〇ダシはキワのネにはない名前である。これはヤマアテに由来するもので、それがそのままネの名称にもなっている。〇〇ダシとは〇〇（多くは山や岬の先端部）が初めて見えるようになる地点を意味しており、つまりダシは「出し」の意味である。こうしたネの多くは水深50～200mの間にあるもので、海底から突出して浅くなっているところをいうが、そのあたりまでオキに出ると陸地は低くなり、多くは海中に没して見えなくなってしまう。

そのため、海中から目標物だけが突出して見えたり、また遠近2つ陸地形の重なり具合（食い合い）で目印となるものが初めて姿を現したり、さらには城ヶ島や大島、房総半島といった三浦半島に比べると規模の大きい岬や島の一部が見えるようになる地点を手がかりにヤマアテするもので、同時にそこが漁場として認識される。つまり、ダシとは、水平方向では陸地と陸地との食い合いを、垂直方向では海と陸地との食い合いをそれぞれ意味する。

そのため、〇〇ダシと命名されるオキのネは、図5に示したヤマアテの中でもマンジュウゴと呼ぶ方法つまり水平線近くに認められる目印を一方向に見ておこなうヤマアテ法により位置が確定される。キワ・オキのオーネが、遠い目印と近い目印という垂直方向の2点を見通す線と作り、それを2方向に見ておこなうヤマアテで位置が確定されるのとは異なった認識の方法がとられている。

そのとき、オキのネに行くときにはロラン（電波航法システム）やGPS（全地球測位システム）といった機器が併用されることが多いのも特徴である。キワのネではGPSなどの機器が用いられることはむしろ希で、とくにキワ・キワのネでは機器を使うまでもなく目視による位置確認法がとら

れる。キワでのミヅキやモグリといった磯漁に用いる船は全長3～5mほどの小型のものでエンジンも船外機が据えられているにすぎず、GPSなどの機器は搭載されていない。

そうしたことを考えると、佐島のようなもともとキワのイソネを基本的な漁の場とする海付きの村の百姓漁師にとって、〇〇ダシと呼ばれるオキやダイナンのネはロランやGPSなどの科学技術が導入されてから利用するようになったといってもよからう⁽¹³⁾。

なお、ヤマアテについては漁場認識のありかたに特化させて、本稿と同様の調査地・時間軸を用いて改めて論じる予定である。

4) ネの名称と汎用度

名称をめぐってオキのネとキワのネとの大きな違いとして指摘できるのは、その汎用性に関する点である。名称の汎用性については、以下に示す4つの段階が想定される。a. 村の領域や職業の枠を越えて汎用性を持つ名称、b. 隣接する村の漁師間で共有する名称、c. 村内の漁師にしか知られていない名称、d. 漁師個人にしか分からない名称。

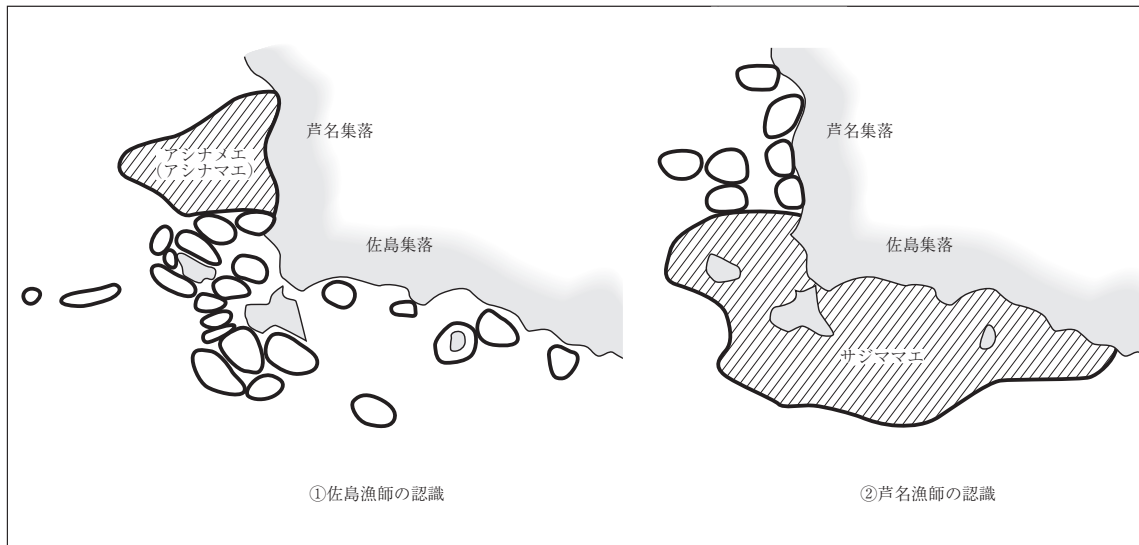
オキのネになると、その名称は公的機関の発行する海図に掲載されているものが多い⁽¹⁴⁾。〇〇ダシの名称にもそれは当てはまる。それは漁船だけでなく、運搬船や客船といった多くの船舶に必要な情報となるからである。また、漁師にとってもオキのネをマエハマのように一村で占有することなく、各地からやってくる漁師により共同して利用されるためでもある。その意味で、オキのネの名称は汎用度が高いし、歴史的にみて漁業の広域化や海上交通の発達とともに汎用性を高める方向に向かったといえる。

それに対して、キワのネの名称は村内でしか通用しないものがほとんどである。とくにキワ・キワのコーネはその傾向が高い。コーネの名称は通常は隣村の人には分からない。マエハマを使って漁をする権利は地先の村にしか認められてこなかったからである。たとえば、19か所もある佐島のコーネを隣村の芦名では一括してサジママエと呼んでいることをみてもそれは理解される。当然、佐島の漁師が芦名のマエハマを指してアシナメ＝アシナマエというときには同じことがいえる。さらにいうと、コーネはおもにモグリとミヅキにより利用されるため、同じ村の中でも磯漁師はその名称を共有していても沖職の漁師には知られていないものが多い。

そうしたコーネに対して、同じキワのネでもキワ・オキのオーネになると隣接村の人と名称を共有する率は高くなる。オーネは入会の意識があり、隣接村の漁師もネに付く魚介以外なら漁が許されてきたからである。

また、ヤマアテのうちオオヤマは村内の人ならほとんどの人が共有する情報であるに対して、ジブンヤマはその人しか知り得ないものとなる。そのため、ジブンヤマで設定されるオカンバは場所も含めて秘諾される傾向がきわめて高い。前述のように、同じ村の漁師でもオカンバの場合は漁師個人が勝手に命名しており、いわば自分にしか通用しない名称となっている。その場合、同じ場所のネであってもオカンバは漁師によって違った名称が付けられている可能性が高い。オカンバは汎用性という点ではもっとも低い名称である。

図 13 マエハマとネの関係



6. 命名からたどる歴史世界

1) 命名にみる地先漁業権の変遷

一般に海付きの村の場合、隣り合った村同志は仲がよくないとされる。漁師の意識の上では、海上では漁師間の決めごとや慣行が法律や規則よりも優先されるが、そうした決めごとがもっとも多いのが隣り合った村の間である。漁場利用に関してもめ事があったり、またはそれを未然に防ぐためにさまざまな取り決めがなされ慣行化しているといつてよい。

ネに付けられる名称からも、それはうかがうことができる。ネの名称には自称と他称がある。それはマエハマ（前浜）として慣行的に地先漁業権が設定される範囲に顕著である。マエハマは民俗空間のキワと一致するが、キワの中でもオキに近いキワ・オキの領域はマエハマではないと主張する漁師もいる。そうした領域では、隣接する村の漁師であっても中・表層の魚のみならず、ネに付く魚介類も採取することができるとするものである。その場合はマエハマはキワ・キワの領域に限定されることになる。その意味で、キワ・オキの領域は慣行的な地先漁業権においてはグレーゾーンであり、地先の村と隣接する村との意見が異なる境界領域ということになる。

佐島の例でいうと、佐島集落の前にあるキワのネを一括して、隣接する他村では「サジママエ」と呼ぶ。これがいわば隣接する村が認める佐島のマエハマである。問題は、そこにハサキ・シラネ・カサゴネといったオーネは含まれないことである。しかし、佐島漁師にとってのマエハマはカサゴネ・シラネ・ハサキを含むキワの領域全域を指す。つまり、佐島のマエハマが意味する範囲として、芦名ではキワの中でもキワ・キワのコーネのみとするのに対して、佐島ではコーネとともにオーネも含むキワの領域全体と捉えていたことになる。そこに隣接村と佐島漁師との意識のズレができる。そのため、他村漁師との諍いは両村の主張が対立するオーネで起こることがほとんどである。

このとき注意すべきは、サジママエはあくまで他称だということである。佐島の漁師はネの名称としてサジママエという言い方はしない。なぜなら、日常的な漁撈活動を通してもっと詳細に分類し命名しているからである。サジママエという領域の設定や命名の仕方が意味を持つのは佐島以外の村人にすぎない。同様に、佐島に隣接する芦名集落の前にあるネを一括りにして佐島ではアシナメと呼んでいる。アシナメとはアシナメエ（芦名前）のことである。この場合も、当然、芦名の住民はアシナメとはいわず、先に検討したように、もっと詳細に分類・命名をしている。

こうした他称と自称がもたらす影響は比較的新しい歴史的出来事によっても顕在化している。佐島の漁師は芦名集落のマエハマをアシナメといい、芦名の漁師は佐島集落のマエハマをサジママエといい、オーネにグレーゾーンを残しながらもそれぞれに相手の地先漁業権を侵すことなく尊重してきた。それが1968年に佐島漁協と芦名漁協が合併して大楠漁協⁽¹⁵⁾が誕生すると、旧慣との間に新たな調整が必要となった。合併後は、制度的にはマエハマの漁場も統一されることになり、オーネ（広義のマエハマ）のみならずコーネ（狭義のマエハマ）に関してもお互いに他村の地先を利用することが可能となったからである。

漁協の合併後は、佐島と芦名の漁師は、ミヅキ漁に関してはどちらの地先でやってもよいが、ワカメだけは他村の地先ではミヅキで採ってはいけないとされた。また、それぞれの村で、ヒジキなどイソの海草は口開けを設けているが、佐島の漁師がアシナメ（芦名のマエハマ）に行くときには、芦名の口開けより3日後（芦名の漁師が海草を2回切った後）でないと入ることができないとされた。さらに、モグリの場合は、大楠漁協で7月1日を解禁日としているが、佐島の漁師がアシナメに入るときは7月20日以降でなくてはならない（つまり7月1日から19日まではアシナメは芦名の漁師しかモグりに使うことはできない）。以上は、佐島漁師が芦名のマエハマを利用するときの決め事であるが、反対に芦名漁師がサジママエ（佐島のマエハマ）を利用するときも同様である。

このように、集落単位の地先漁業権に関する旧慣は、漁協の合併を契機にして、それまでの曖昧な部分を明確化しつつ、また新たな取り決めを付加しながら、新制度のもと受け継がれたことになった⁽¹⁶⁾。

2) ネの領有と隣接村との争論

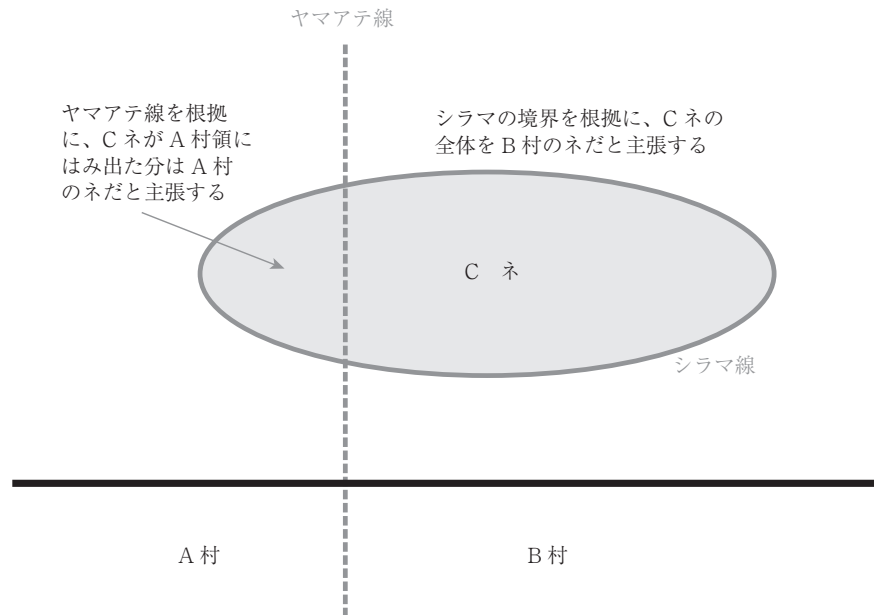
前述のように、漁協の合併以前は、マエハマではネに付いた魚介類を主な漁獲対象とするモグリ漁やミヅキ漁は地先村の独占的な権利のもとにあった。そうしたネに付いた魚介類に対して、アジやカマスなどの中・表層魚は地先の領域を横断して行き来するものなので、合併以前から他村のマエハマでも漁をすることはできるとされた。しかし現実には、他村の漁師が自分のマエハマに入ってくると怒って追い返す人がかならず存在した。

図7に示した三浦半島西岸の場合、そうした権利意識の主張には村柄が大きく関わっているとされる。佐島近隣の3村を比べると、長井（佐島の南隣）がもっとも権利意識が強く、次に佐島、芦名（佐島の北隣）の順であった。昔から佐島には「長井300軒、佐島100軒、芦名30軒」という言い方がある。これはたんに漁師の数や村の規模を示すだけでなく、いろいろな意味で漁師の“強さ”を意味している。この言葉に象徴されるように、長井にはむかしから漁師が多くいて競争が激しい、と同時に商店が多く立ち並ぶマチ的な雰囲気⁽¹⁷⁾を持っていた。その分だけ、長井は、漁業者意識は高く権利意識も強かったが、反対に漁業者の数が3村の中ではもっとも少なく、反対に耕地が多くある芦名は海に対する権利の主張は弱かったとされる。

そのため、両村に挟まれて位置する佐島の漁師は長井のキワにあるネには漁に行くことはなくても、芦名の前にあるアシナメのネにはよくいっていた。佐島ではアシナメという言い方が存在するのにナガイマエというネの名前は存在しないのはそのためである。それに対して、長井の漁師は佐島や芦名の方にまで中・表層の魚を追ってやってきたし、そうしたことで佐島漁師や芦名漁師とけんかになることもあった。そうしたとき佐島漁師の多くは、「長井モンは気が荒い」といって、いつも若干気後れ気味で、個人としては黙認してしまうことも多かったという。

三浦半島西岸のようにイソネが卓越する地域では、前述のように、隣り合った村との地先の領有意識はとくにネに関して強く意識される。それに対して、シラマ（砂地）は領有域としてはあまり意識されない。つまり、地先の領有はネを分けることが基本となる。シラマの領有権が争われるこ

図 14 マエハマのネ（コーネ）の帰属をめぐる争論



とはない。それは磯漁を主とした村ではシラマは利用価値が少ないからである。反面、シラマはネを分ける境界として重要な役割を果たすことになる。前述のように、オキヤキワ・オキのネはヤマアテにより、また地先となるキワ・キワのネはシラマによって分けられるからである。

その時ひとつの問題が起こる。通常、隣接する村同士は地先の境界をヤマアテによって決めていることが多い。問題は地先のうちとくにキワ・オキのネはヤマアテではきちんと分けることができないことである（ヤマアテで見通したラインがシラマを通っているときには問題ない）。

ヤマアテは遠い目印と近くの目印とを見通した線で示されるが、当然それは直線となる。そのため、村と村の境界にあるネをめぐる問題が持ち上がる。図14のように、B村に主体があるネがA村の中に張り出してきていることは多い（その反対のパターンもありうる）。そのとき、はみ出した部分の帰属をめぐるAとBとで主張が対立する。A村でははみ出してきた部分はヤマアテにしたがって自分たちが利用してよいネだと主張する。それに対して、B村ではネの境界はシラマであるのだから、あくまでシラマを境界とし、Bの領域に主体があるネはたとえA側にはみ出した部分でもそれはBに利用権があるとする。

その結果、BからAの側にはみ出た分のネはAとBの競合的入会のような状態になり、利用の仕方を両村相対の話し合いで決めなくてはならない。それが現在、暗黙の慣行（口伝が多い）として残っている。

そうした慣行は先述の村柄やまたその時々村の力関係、ときには直接交渉に当たる漁協（村単位の旧漁協）組合長の押しの強さといったことにより決められることもあったとされる。一例を挙げれば、〇〇ネの場合、ワカメの採集では、口開けの日を1日ずらして設定する。押しの強い方が1日早く口開け日を設定し、弱い方が1日遅く採集に出ることになる。つまり強い方に1日だけ独占的使用権が与えられたことになる。もちろんそうした時間差を付けることなく、まったく同じ日に口開け日が設けられることもある。こうしたことがあるため、たいてい海付きの村の場合には、隣接する村同士は仲が良くないとされるのである。

そうした村柄の強弱の関係でいうと、佐島と接する村でいえば、伝統的には南に接する長井が佐島より強く、北に接する芦名より佐島は強いとされる。つまり長井>佐島>芦名の順となる。中で

も長井は三浦半島西岸では村として人口も多く漁業生産の規模も抜きん出ているため、前述のように、佐島はいつも長井に一目置くことになる。また、それとは反対の力関係に佐島と芦名はある。こうした隣接した村の力関係が、境界領域のイソネの利用の仕方を慣行的に決めるときには影響しており、両村入会としながら結局は力の強い方にたいてい若干有利な利用が認められることで決着する。それは、慣行的に佐島の漁師が芦名のマエハマには行くことはあっても、長井には行かないことに象徴されよう⁽¹⁸⁾。

7. おわりに—小括—

これまで検討してきたように、命名にみる漁場認識のあり方は一様ではない。それは、水深と陸からの距離によって、以下のように3つの類型に分類することができることがわかった。

- a. 民俗空間のキワのうち陸からもっとも近いところ（キワ・キワ）、水深 20 m 未満の浅いところにあるイソネ。
- b. キワのうちオキ側のところ（キワ・オキ）、水深 20 m あたりのネ。
- c. 民俗空間でいうオキからダイナンにかけて、水深 20 m 超で 200 m くらいまでの突出して浅くなっているところにあるネ。

この3類型に対応させて、漁場認識のあり方を、(1) ネの名称、(2) ネの位置特定、(3) ネの形体認識、(4) 名称の認知度の4要素に分けてそれぞれ整理してみる。

(1) ネの名称

- a. コーネ（小根）と一括されるネである。コーネはさらに細かく分けられているが、その一つ一つに固有名を持つ。「〇〇マエ」や「〇〇シリ」のように、隣接する陸地やそこにある対象物との相対的位置関係から命名されることが多い。さらに、ムラ人に共通するネの名前とともに、ジブンヤマと称する個人的なネも多く存在する。
- b. オーネ（大根）と一括されるネである。「〇〇ネ」の名称が主。また、内部を細分化するときには「〇〇モタレ」のようにヤマアテに用いるオオヤマの名称がそうした部分名称に用いられることがある。
- c. 「〇〇ダシ」の名称が付けられたものが多い。それは基本的にヤマアテの名称と一致する。

(2) ネの位置特定

- a. ネはモグリやミヅキといった磯漁により直接かつ日常的に視認される。ネの区画と領域化の目安として用いられるのがシラマ（砂地）である。シラマの線がネを分ける境界となる。ヤマアテは補助的な意味しか持たない。
- b. オオヤマと呼ぶ「〇〇モタレ」（南北方向に5本）と「〇〇ガケ」（東西方向に4本）という2方向からのヤマアテにより、ネの位置が特定される。
- c. 「〇〇ダシ」という陸地形の食い合いによる1方向からのヤマアテで位置が特定される。はじめに点として特定され、そのち周囲の広がりをもネとして認識する。

(3) ネの形体認識

- a. もっとも詳細な認識。シラマを境界線として用いることで、微細な区画と実体に忠実な不定形の領域化が可能となる。
- b. コーネに比べると大きな区画になる。2方向からのヤマアテによりネの外形が特定され、その内部もグリッド状に区画される。そのためネの領域は直線的となる。漁の利便性からヤマアテによりネの内部が細分化されることがある。

c. もっとも大きな区画となる。ただし、「〇〇ダシ」で特定されたポイントの周辺に広がりをもって認識されるため、正確にはネの領域化はできない。

(4) 名称の認知度

a. ネの名称は地先の村のなかでしか通用しない固有名がほとんどである。慣行的にマエハマとして地先の村に独占的な利用が認められてきたことが背景にある。隣接村からはマエハマ全体が「(集落名)マエ」と一括して呼ばれる。また、村内で通用するネの名称のほか、オカンバ(個人の得意とするネ)のように、個人にしか分からないきわめて個別性の高いネの名称もある。

b. ネは地先の延長上にありながら、隣接する村の間で共有されるネの名称となる。隣村の漁師にも中表層魚を対象とする漁は認められるため、隣接する村においてネが共的に利用されることが背景にある。

c. 公的な機関が発行する海図に載せられるものが多い。漁船だけでなく貨物船の船乗りなどにも用いられ、村域や職業の枠を越えて共有されるネの名称となる。その意味で、もっとも汎用性が高い名称となる。

以上が、ネの命名という行為を通してみたとき明らかになった、漁場認識のあり方の3類型である。

なお、ネの認識を問うとき、難しいのは、佐島の漁師とはいっても、その中には磯漁師、沖職の漁師、大型巻網船の乗組員というように、多様な漁業への従事パターンがあり、一括りには捉えられないことである。ひとつの海付きの村の中でも、じつはさまざまな漁法や生計維持のあり方が存在する。ミヅキやモグリのようないし磯漁だけをおこなう漁師や沖に出て一本釣だけをおこなっている漁師というのは実際には存在しない。磯漁と沖漁のどちらに重きを置くかは別としても、どちらの漁もおこなうのが一般的である。

さらには、たとえ一人の漁師でも、その長い人生の中では、アグリ網(揚繰網)のような大型巻網船の乗組員となって房総沖や伊豆大島近海までいってたり、また潜水技術を活かして港湾潜水夫として全国各地に出稼ぎに出たりした経験を持つものは多い。とくに若いうちは家を出てさまざまな経験を積む人は多かった。佐島漁師の一生をみたとき、若いときは一年のうちの半分以上を大型巻き網船の乗組員や出稼ぎにでていても、家にいるときにはミヅキやモグリなどの磯漁をおこない、年をとって道楽に近い一本釣や磯漁中心の生活をするようになった人もいる。

つまり、そのように、同じ村内の漁師だからといって、漁師を一様なものとして扱うことはできないし、だからこそネの認識も個人のレベルでは多様なものとなるのである。沖漁に精通した人から沖のネについて聞いたことと、磯漁に重きを置いた人に聞いたキワのネについての情報を単純に足し算することはできないのはそのためである。そうした知識を単純に合算してしまえば、それはその地域に伝承される知識の総量を示すものではあっても、“生きる”ための技術を示しているとはいえないし、超人的にすぐれた技能を有する漁師像という虚像を描くことになってしまうであろう。本稿では少なくともそれを避けるために、百姓漁師を自認しモグリとミヅキの組み合わせを基幹とする磯漁を営んできた漁師に焦点を絞り漁場認識を論じたつもりである。

注

- (1) 国家的権力の介入としては、たとえばネを海図に掲載するため名称の統一をはかることが挙げられる。
- (2) 聞き取りの内容は海底地形に関する認識など観念の問題に及ぶことも多いため、必ずしも設定した時間軸にそって忠実に復元されているわけではない。話者が漁をはじめた1930年代から調査時点となる1990年代にいたるまでの中で変遷してきたことも多く含まれると考える。そうしたことについてはそのつど文中で明確化してゆく。
- (3) ウミ側とオカ側との接触面において、ヤトがキワ、ヤマがオキにそれぞれ対応することについては十分に説明することはできないなど、いくつかの問題が生じる。
- (4) 本来なら、概念図においてもウミ側は水平的な段階構造にすべきである。内陸の集落がこれまで学史上つねに同心円状に概念化されてきたことはきわめて対照的となる。そこに海付きの村における民俗世界観の特徴が表れているとも考えられるが、その場合にはウミ側の水平的な民俗空間と同心円状に描かれるオカとの間に不連続面が生じてしまうという新たな問題が発生する。
- (5) オキノシマは遠いため実際の漁場を使うことはできないが、佐島では天気予兆に用いている。
- (6) モグリ漁は水深5～6尋（7～11m）を境にして、それより浅場でおこなうのがキワモグリ、またそれより深場でおこなうのがオキモグリとなる。キワモグリは別名タルモグリというのに対して、オキモグリは別名ホンドンモグリ（フンドンモグリ）という。それはフンドン（分銅：重り）を使って一気に6尋から15尋（9～23m）も潜っておこなうためである。
- (7) キワではエビアミなどもおこなわれるが、百姓漁師が継続的に世代を超えておこなってきた漁はミヅキとモグリの組み合わせであるといっていよい。
- (8) ヒロという単位は両手を広げたときの長さ由来する身体尺であるため、人によりその長さが異なる。また視認することのできる範囲も目の良し悪しで異なる。したがって、オキとキワとの境界は1本の線で截然と分けられるようなものではなく、人間側の条件とともにその日の天候や潮の良し悪しなどによっても影響されることになり、ある程度の幅を持っている。
- (9) オキではカツオー本釣やイワシ巻網といった大型の漁もおこなわれていたが、それは基本的に会社経営の集団漁であった。
- (10) 海上での伝統的な位置確認法は単にヤマと称されることが多いが、ヤマという言葉は佐島では多様な意味で用いられているため、本稿ではあえてヤマアテと表記する。
- (11) キワ・キワおよびキワ・オキは民俗用語としてあるわけではない。便宜的に筆者が漁場利用のあり方をもとにしてキワ空間を類別化するために造語したものである。
- (12) 海底での岩の状況が陸上の山との関係で語られるのは興味深い。佐島の世界観では、海底の微地形は遠望できる大地形と関連していると認識されている。
- (13) 明治期には佐島においてもヤンノーと呼ぶカツオー本釣の船が2艘あり、黒潮本流のダイナンのネまで行っはカツオ漁をおこなっていた。それが暴風による難船が2年続き多くの死者をだしたため、以後その漁は途絶えてしまった。
- (14) 海図に載るネの名称としては、発見者（船）の名称とともに、それまで漁業者等により用いられてきた慣行名が採用されるようになっている（海上保安庁水路部、1972）。
- (15) 大楠漁業協同組合は、昭和43年（1968）に横須賀市西部地区の佐島、芦名、秋谷の3漁協が合併して設立された。合併当時、漁業者数・漁獲高とももともと大きかった佐島に大楠漁協の本部が置かれ、そこには水揚げされた魚の競りをおこなう卸売市場が設けられた。実態としては佐島漁協が隣接する小漁協を吸収して大楠漁協となったといえる。
- (16) 現状では漁協にマエハマの利用に関する新たな取り決めに示す文書はない。合併後のある時期にそうした文章が作られたかどうか不明である。そのため、今後また村間の解釈に隔たりが生じる可能性は大きい。とくにオーネとコーネという区別が現状ではほとんどなくなっていることやそのことに起因してマエハマの領域が不明になってきていることも、そうした解釈の曖昧化を招く原因となりえる。
- (17) 象徴的なこととしては、明治期には長井には米屋が8軒もあったとされる。
- (18) 長井＞佐島＞芦名という暗黙の力関係は、1968年の横須賀西部地区で漁業集落毎にあった漁協を統合するときに顕在化する。結局、長井は単独の漁協のままで残り、佐島と芦名はさらに久留和と秋谷を加えて合併し現在の大楠漁協になった。

参考文献

- 池田 等 1993 「葉山沖の甘鯛場」『潮騒だより』4
- 井上正昭 1969 「海底地形別に見たアワビの漁獲量」『水産増殖』15-1
- 海上保安庁水路部 1972 「海底地名の付与について」『地理学評論』45-4
- 神奈川県教育庁指導部文化財保護課編 1971 『相模湾漁撈習俗調査報告書』神奈川県教育委員会
- 齊藤毅・関信夫 1980 「『山たて』にみられる環境と知覚空間」『地理』25-11
- 高橋そよ 2004 「沖縄・佐良浜における素潜り漁師の漁場認識」『エコソフィア』14号
- 田和正孝 1984 「沿岸漁場利用形態の生態学的研究」『人文地理』36-3
- 中野 泰 2003 「シロバエ考」『国立歴史民俗博物館研究報告』105集
- 矢島真澄 2003 「沿岸漁民による漁場認知の重層性に関する研究」『地理学評論』76-2
- 安室 知 2008 「海付きの村に生きる」『日本の民俗 1—海と里—』吉川弘文館
- 安室 知 2011 「『百姓漁師』という生き方」『国立歴史民俗博物館研究報告』162集 [『日本民俗生業論』2012、慶友社、所収]